

平成 30 年度

カンボジア教育実地研修 学生報告書

(2019 年 1 月 9 日～1 月 18 日)

2019 年 2 月

愛知教育大学国際交流センター

目次

はじめに	松本 昭彦（副学長 グローバル推進担当）	1
研修の行程		3
学生からの報告		
教育学研究・保健体育，修士1年		19
教育実践研究・教職実践，修士1年		23
中等・理科，3年		27
中等・数学，3年		31
初等・保健体育，3年		35
初等・情報，3年		39
現代学芸・国際文化コース，3年		43
養護，3年		47
養護，3年		51
養護，3年		55
養護，3年		59
養護，3年		63
養護，3年		67
おわりに		71

はじめに

愛知教育大学 副学長（グローバル推進担当）

松本昭彦

本学は、平成 24 年度に名古屋大学及び三重大と連携して大学改革強化推進補助金事業「アジアを中心とする国際人材育成と大学連携による国際化の加速度的推進」を受託、その後、教育人材支援の一環として、平成 26 年 7 月にカンボジア国立教育研究所(NIE:National Institute of Education)と学術交流協定を締結し、カンボジアの初等・中等教育支援をプロジェクトとして立ち上げました。同年 10 月からは、毎年 NIE から研修員を受入れ、平成 27 年より毎年 1 月、カンボジアの小・中学校等の児童・生徒たちの健康調査に関して、現地で実地調査を実施しています。

愛知県内の小・中学校においては、全国でも最も多くの外国人児童生徒が在籍し、一般の教師としての資質はもちろんのこと、語学能力やコミュニケーション力、更には教師として多文化への理解が求められています。そこで、上記の三大学連携プロジェクトにおいて、カンボジアの教育人材支援を展開していることもあり、NIE を介して現地の小学校等での現地調査及び授業実習での現場を体験することで、将来教師となる学生の資質向上を目指すとともに、名古屋大学が現地で開設している海外事務所を活用し、カンボジアの大学生たちとの意見交換等、交流を実施することで、グローバルなモノの見方・考え方を養うことを目指し、日本学生支援機構（JASSO: Japan Student Services Organization）の平成 30 年度派遣留学海外留学支援制度（協定派遣）『養護教諭養成課程を中心としたカンボジア教育実地研修プログラム』（プログラム形態：短期研修・研究型）に応募し、採択されました。

本学は、養護教諭養成課程に在籍する学生を中心にカンボジアへ派遣し、現地の学校での健康調査及び実地研修を通じて、海外における実地調査の手法、教育現場で応用できる知識の獲得を目指しています。また、現地の教育現場観察や児童・大学生との交流により、多角的な視点から教育を考察する能力を養います。さらに、カンボジアへの教育協力に携わる支援団体との意見交換や、カンボジア教育省の関係者からの講義等を通じ、開発途上国への教育協力につて知見を深め、将来、教育人材として広く国際社会に貢献できる人材の育成を目的としています。また本年度からは、将来、教員となる現地の大学生に身体測定のやり方を伝授し、本学の認定証を発行することにしました。

これらの目的を達成すべく、本学教職員、四大学（前述の三大学+岐阜大学）連携大学教職員で構成されるカンボジア健康教育支援団にジョイントする形で、平成 31 年 1 月 9 日から 18 日まで、13 名の学生がカンボジアに赴き、カンボジア教育実地研修を実施しました。ここに、実地研修を終了した学生の報告をまとめました。

本報告書が今後、このプログラムのみならず、他の海外実地研修に参加する学生諸君の参考になることを期待します。カウンターパートであるカンボジア NIE の諸氏、シェムリアップの PTTC (Primary Teacher Traing College) 教員や学生の皆さん、並びに多くの学内・学外関係者の協力を得て、無事に今年度のプログラムを終えられたことを、ここに感謝いたします。

カンボジア教育実地研修行程（2019.01.09～01.18）

カンボジア教育実地研修 事前研修

研修日	曜日	時間	研修内容	担当教員
8/8	水	13:30～ 14:30	研修の概要	玉田
10/24	水	15:40～ 17:00	カンボジアの基礎知識(1) (個人発表、全体学習)	玉田
10/31	水	15:30～ 17:00	カンボジアの基礎知識(2) (個人発表、全体学習)	玉田
11/7	水	15:30～ 17:00	経験者に聞く (含・持ち物、準備するもの)	玉田
11/21	水	15:30～ 17:00	健康管理講習 クメール語学習	田中 留学生
11/28	水	15:40～ 17:00	クメール語学習 測定方法・データ入力講習	留学生 寺本・縄田
12/12	水	15:40～ 17:00	クメール語学習 測定方法・データ入力講習	留学生 寺本・縄田
12/19	水	15:30～ 17:00	測定方法・データ入力講習	寺本・縄田
1/7	金	16:40～ 18:00	結団式、荷物分担	全員

- ・ 「カンボジアの基礎知識」では、地理、気候、風俗・習慣、文化、歴史、政治・経済、教育、日本とのつながり等について、学生自身がまとめたものを発表し学習を深めた。
- ・ 「健康管理講習」では、カンボジアの衛生事情、感染症、安全等について学んだ。
- ・ クメール語学習はカンボジア留学生から、日常語、測定に役立つ言葉を学んだ。
- ・ 3回にわたり測定やデータ入力の方法について学んだ。

カンボジアでの日程(時間は現地時間で表記)

1月9日(水) はれ

08:15 中部国際空港に集合。近畿日本ツーリストからチケット配布と説明。



【全員元気に集合】

- 08:30 荷物を預けて、搭乗券を受け取る。
出国手続き (パスポート顔写真による顔認証システムでできるようになった。)
- 09:30 搭乗開始
- 10:00 出発 ベトナム航空 VN341 ホーチミン行き 12:00 機内昼食
- 13:40 (日本時間 15:40) ホーチミン (タンソンニャット国際空港) 着
- 16:05 出発 ベトナム航空 VN920 プノンペン行き
- 16:35 プノンペン国際空港着
- 17:10 バスでホテル (カタリホテル) へ向かう。
平日なので夕方この時間帯は、かなり渋滞している。
- 18:30 ホテル着、チェックイン。現在愛教大に留学している NIE 教官チャンセンさんが、ホテルで出迎えてくれた。(チャンセンさんは今回の研修の準備のため、一足先に帰国していた。)
- 19:30 ホテル近くの中華料理レストランに全員が集い夕食。もりもり食べる学生がいる一方、疲れからか食が進まない学生もいる。今夜は後藤学長の計らいで全員がご馳走にあずかる。「ありがとうございました。おいしかったです。」
- 21:00 夕食が終わり、ホテルに戻って明日からの測定に向けて器材の整理と準備。
皆疲れているため、早めに休む。

1月10日(木) はれ

- 06:00～ 朝食 (時間が早いレストランでの朝食が用意された)
- 06:30 バスで NIE に向かう。
- 06:40 本日の測定場所は4班に分かれて測定が可能なスペースのある建物の中。空調が効くのでありがたい。去年は講堂を使用したけど、今年は都合で変更。測定機器の準備。日本での事前学習のおかげで、学生は手間取ることなく準備をしている。今回は小学生のみ測定を行うことになった。

07:55 1年生（午前）の測定開始。（同じ学年でも午前の部と午後の部に分かれている）事前に生徒の個票（測定結果等を記録するもの）を準備していったので、スムーズに取りかかれた。

【測定の流れ】

①子どもに身長・体重の測定の仕方、個人写真撮影の説明

②体組成測定の仕方の説明

③クラスごとの全体写真撮影（この写真は各クラスに記念に渡すもの）

④身長・体重の測定、個人写真撮影、体組成測定

体組成測定では、筋肉量や骨密度が測定できる。

⑤測定後、日本から用意していった折り紙を一人に一個ずつ渡す。

通訳さん4人がクラスを4つのグループに分け、4か所の測定場所でグループごとに測定していった。愛教大生3人とNIE学生2人の5人で一つの測定班を作り、協力し合って測定していった。NIE職員（イェンさん）も協力。



【NIE学生（水色制服）と協力して測定】

08:00 測定の間にNIEのソバンナ学長を訪問（学長、副学長等数名で）
ソバンナ学長からはこれまでの愛知教育大学からの支援に対してお礼があった。

08:25 1年生（午前）測定終了。
その後、2年生（午前）以降の測定が順次行われる。

11:00 午前の部の測定が終了。

11:30 学生は徒歩でNIE近くのレストランに行き、昼食。

13:15 午後の部の測定開始。1年生の2つのクラスから始める。

1クラスの測定に20分程度がかかる。

2年生（午後）以降の測定が順次行われる。

愛教大生たちは、測定の合間に同じ班になったNIE学生と談笑している。また、折り紙を教えながら交流を深めている。

16:15 午後の部の測定が終了。

NIE 学生に今日の活動について聞いたところ、「楽しかった。大変勉強になった。これまで身長や体重を測ったことはあったが、継続しては測っていない。継続して測り、変化を見ることは重要だと思う。また、筋肉量や骨密度を知ることは大切だと思う。」と話してくれた。

16 : 30 後片付けをしてバスへ移動。

16 : 40 NIE 発、ホテルへ。

ホテルの部屋で荷物整理

18 : 00 NIE の招待で市内のレストランでバーベキュー料理の夕食。職員との懇親を深める。ソバナナ学長はじめ多くの職員が出席。大いに盛り上がる。食べ放題のため学生の食欲も旺盛である。

20 : 00 懇親会終了。NIE 職員に感謝してホテルに戻る。

あすも朝が早いので、今夜のデータ整理は行わず、早めに休むようにする。

1 月 1 1 日（金）はれ

06 : 30～ 朝食

07 : 20 バスで NIE に向かう。

06 : 40 NIE に到着。昨日と同じ建物の中で測定の準備。今日の測定は、昨日実施できなかった 4 年・6 年の 2 クラスを行う。その後、3 年と 5 年で食まるファイブの紙芝居による食育のワークショップを行う。今年は、食まるファイブに扮した学生 5 人もキャラクターを演じることになった。

07 : 40 食まるファイブの紙芝居練習を行う。

08 : 15 4 年生の測定開始。

08 : 35 4 年生の測定終了。

08 : 45 6 年生の測定開始。

09 : 10 6 年生の測定終了。

測定器具等の後片付け。

09 : 25 後藤学長から NIE 学生に身体測定講習修了証が手渡される。



【学長から身体測定講習修了証が渡される】

- 09 : 45 3年生で食まるファイブの紙芝居による食育のワークショップを行った。
 圓岡先生とチャンセンさん（通訳も担当）が紙芝居を担当し、食まるファイブに
 扮した学生がキャラクターを演じた。
- 10 : 05 5年生で食まるファイブの紙芝居を行った。
- 10 : 20 紙芝居終了後、5年・3年生の子どもたちに食まるバッジをプレゼントした。
 バランスよく食事ができている子どもには大きなバッジもプレゼントした。



【食まるファイブの紙芝居】

- 11 : 05 NIE を出てバスでホテルに向かう。
- 11 : 15 ホテル着。各自で昼食。
 昼食後、学長、副学長等数名はNIEにて教育省長官（Mr.Nath Bunroeun）への
 表敬訪問。その後、カンボジア国民議会への表敬訪問。
 学生はトゥールスレン博物館を視察。その後、カンボジア国民議会への表敬訪
 問。
- 13 : 30 教育省長官（Mr.Nath Bunroeun）を表敬訪問。
 後藤学長から、これまでの経緯の説明、現状、今後についての話があった。
- ・ 今回の訪問で肥満の子どもが増えていることに心配している。
 - ・ 調査結果を生かして、カンボジアの先生の食育に対するスキルアップが必要
 と考えている。そのためのワークショップも行っている。
 - ・ 今回はスキルを育てるためにNIE 学生に身体測定講習修了証を渡した。
 - ・ スキルをもった先生がカンボジア全国にできれば、全国のデータが集まる。
 そのためのマニュアル作りに協力したいと思う。
- 教育省長官から、これまでの支援に対してのお礼と、今後の支援に対するお願い
 があった。
- ・ 大学のカリキュラムに発育調査のスキルを学ぶものを入れたい。
 - ・ 実験校（NIE、PTTC）でマニュアルを作成し、それをカンボジア全国に広げて
 いきたい。
 - ・ 子どもの成長を国として考えていく。

14 : 45 表敬訪問終了。移動。

15 : 10 学生と国会で合流し、カンボジア国民議会への表敬訪問。

国民議会側出席者：Nguon Nhel 博士（第一副議長）

Hun Many（第七委員会委員長、現首相の息子）

他、国会議員数名

後藤学長から、愛知教育大学の概要説明、これまでのカンボジアとのつながり、これまでの発育調査について等を含めて挨拶があった。

続いて、寺本先生からこれまでの発育調査からわかったことの説明があった。都市部と農村部の差、給食のある学校とない学校の差についての説明や、発育曲線についての説明がなされた。また、カンボジアのオリジナルな発育曲線を作る必要性和縦断的で継続的な測定の必要性が説明された。

続いて、学生がキャラクターを演じての食まるファイブの紙芝居を披露した。学長から、愛知教育大学とNIEの連携が一層進むように、予算面での検討のお願いがなされた。

副議長からは、これまでの愛知教育大学の支援に対するお礼とともに、食育をカリキュラムに入れていきたいとの話があった。

今回の訪問はカンボジアTV局の取材もあり、その日の夜のニュースで流された。



【カンボジア国民議会への表敬訪問】

16 : 40 国会議事堂を出てホテルに向かう。

17 : 15 学生と測定データ入力 of 打ち合わせ。このあと、各班で夕食、データ入力を行い、21 : 00 にロビーへUSBを持ってくることになった。

多くの学生は夕食を兼ねてイオンへ行った。

あすはシェムリアップへの移動日なので、荷物整理をして早めに休む。

1月12日（土）はれ

06 : 30～ 朝食

08 : 00 バスでシェムリアップに向かう。プノンペンからシェムリアップまで314 km、約6時間の道のりである。（チャンセンさん、イエンさんも同行）

ここで、後藤学長、野田先生、清水先生と別れる。学長はじめ3名は一足先に日本に戻る。

バスはプノンペン市街地を抜け、農村部をひた走る。ほとんど信号はない。

09:30 ドライブインでトイレ休憩

09:40 ドライブイン発

11:25 ドライブインで2回目のトイレ休憩

11:40 ドライブイン発

13:10 レストラン着 昼食（各自で注文）

バスに乗っている時間が長いため、良い休憩時間となった。

14:00 レストラン発、

14:25 ホテル（タプロームホテル）着、荷物を降ろし部屋へ入る。

15:15 バスで、カンボジア民族文化村へ向かう。

15:30 カンボジア民族文化村着、場内を班ごとに見学。（入場料15ドル）

観光客や家族連れが来ていたが、混み合うこともなくゆっくり見学できた。

17:50 バスでホテルに戻る。

18:10 ホテル着。この後、各班で夕食と昨日までに測定したデータの入力作業。

1月13日（日）はれ

06:30～ 朝食

08:45 バスで、チケットセンターに向かう。

09:05 チケットセンターで、観光チケットを作る。（3日間券で1人62ドル）

スムーズに購入できた。

09:25 チケットセンターを出て、アンコール・トム遺跡へ向かう。

09:45 アンコール・トム遺跡着、遺跡内を歩いて視察。また、遺跡内のバイヨン寺院を視察。



【アンコール・トム遺跡にて】

11:10 アンコール・トム遺跡の視察を終え、バスでアンコールティータイム（伝統的な焼き菓子のお店）に向かい、土産購入。

- 12:15 バスで移動し、レストラン（クメール料理）で昼食。各自で好きなものを注文。
昼食後、一旦ホテルに寄る。
- 13:50 ホテルを出て、バスでトンレサップ湖に向かう。
- 14:25 湖に注ぐ川の栈橋から船に乗り、トンレサップ湖を視察。途中、水上生活している様子を見ることができる。世界でも有数の水上生活の様子が見られる場所と
のことである。昨年に比べて水の量が少ないように感じた。ただ、川から湖に出
るとその大きさに目を見張った。琵琶湖の数倍あるということだが、まるで海で
ある。対岸が見えず、長い水平線が目に見え込んでくる。船の上や、立ち寄った
湖上の売店で、学生たちは思い思いの時間を過ごしている。



【水上生活の様子を視察】

- 15:55 湖から川に戻り、栈橋に着く。下船し、バスでホテルに向かう。
- 16:25 ホテル着、しばらく自由時間。
- 18:15 ロビーに集合し、バスで夕食会場へ。今日は民族舞踊とアプサラダンスを觀賞
しながらバイキングの夕食。学生は好みの料理をおいしそうに食べている。
- 20:40 夕食を終えホテルに向かう。
- 20:55 ホテル着。データの入った USB 回収。
あすは PTTC でワークショップがあり、朝も早いので、早めに休む。

1月14日（月）はれ

- 06:30～ 朝食
- 08:10 バスで、アンコール・ワット遺跡に向かう。
- 08:30 アンコール・ワット遺跡着、遺跡内を4班に分かれて視察。各班に通訳ガイド
1名が付く。今年も恒例の「みんなでジャンピング」写真を撮る。
さすがに有名な世界遺産だけあって、観光客が多い。
- 10:45 視察を終え、小型バス2台に分かれて乗車し、タ・プローム遺跡に向かう。
- 10:55 タ・プローム遺跡着、遺跡内を4班に分かれて視察。
- 12:00 視察を終え、途中小型バスから大型バスに乗り換え、昼食会場へ。

- 12:20 昼食は遺跡近くのホテル内にある飲茶のレストラン。セットメニューで美味しい料理であった。
- 13:30 昼食を終え、バスで PTTC に向かう。
- 13:50 PTTC 着。松本先生は PTTC 学長に挨拶。
- 14:15 食育のワークショップ開始。(PTTC 学生 24 名。本学学生も参加)
 バランスのとれた食事をとることの大切さを知らせることが目的。
 圓岡先生とチャンセンさん(通訳も担当)が紙芝居を担当し、食まるファイブに扮した学生がキャラクターを演じた。
 食まるファイブのバッジを PTTC 学生に配る。
- 14:40 食育のワークショップ終了。
- 14:45 発育調査の目的と方法についてのワークショップ開始。
 寺本先生とイェンさんがスライドを使って説明。



【発育調査の目的と方法についての
 ワークショップ】

- 15:20 発育調査のワークショップ終了。
- 15:25 身体測定の方法に関するワークショップが始まる。本学学生と PTTC 学生 24 名が 4 つの班に分かれ、(1 班あたり本学学生 3 名、PTTC 学生 6 名)、実地体験が始まる。どの班からも笑い声が絶えず、英語での会話を交わしたり、通訳を挟んで会話をしたりして、和気あいあいとした雰囲気の中でワークショップが進む。
 この日、身体測定の方法を学んだ PTTC 学生は、あすから 3 つの小学校で行われる測定に協力することになる。

PTTC 学生の感想(今日のワークショップについて)

- ・いろいろ貴重な経験ができた。将来先生になったら子どもたちに教えていきたい。
- ・食まるファイブは子どもたちにわかりやすいと思った。肉を食べたら体で何が作られるのか、ごはんを食べたら何が作られるのかが良くわかる。
- ・身体測定の体験は楽しかった。先生になって自分のクラスでも試したい。

- 16:15 身体測定の方法に関するワークショップが終わり、PTTC 学生に今日のワークショップについてアンケートで聞く。
- 16:45 PTTC 出発、途中、アンコールクッキーの店、キャンディの店に寄り土産購入。
- 17:45 お店を出て、ホテルに向かう。
- 18:00 ホテル着。本日のデータ入力は無し。各班で夕食。自由行動。
あすは出発が早いので、早めに休む。

1月15日（火）はれ

- 05:35 ホテルを出発。朝食はバスの中で弁当（チャーハン）を食べる。
本日は Thlorok 小学校の児童を測定する予定。チャンセンさん、イェンさんも同行。
- 05:45 途中 PTTC に寄り、今日の測定を手伝う PTTC 学生 8 名、教官 1 名と合流。
Thlorok 小学校は農村部にある地方の学校であり、途中はかなりの悪路であった。
- 06:45 学校着。ちょうど子どもたちが登校してくる時間で、いち早く登校した当番の子どもたちが校庭、校舎の掃除をしている。
一方炊事場では、当番の子どもたち（5 年生）が大きな鍋でごはんと菜っ葉の入った汁を作っており、これが朝の給食となる。給食は WFP（World Food Program）の支援で行われている。
- 07:15 作った給食を小さな鍋に小分けして各教室に運び配膳していた。ごはん汁をぶっかけた簡素なものである。子どもたちは、教室の前の廊下に座り給食を取っていた。
学生たちは、給食を作っている様子や給食を食べる様子を興味深く観察していた。



【当番がご飯を炊く様子】



【配膳の様子】

- 07:35 給食後 6 年生が外に出て、鍵盤ハーモニカを伴奏して「しあわせなら手をたたこ」を歌っていた。カンボジア語、フランス語、日本語で歌っていた。昨年は見られなかった光景である。
- 07:55 PTTC 学生と一緒に測定の準備に取り掛かる。

今年の PTTC 学生の中には、昨年も測定に参加した学生が一部いる。

08 : 15 学生リーダーの大内さんから測定スタッフ全体への説明がある。

08 : 35 6 年生へ測定の説明があり、その後測定が行われる。

今日の測定は、農村部の給食ありの学校におけるものである。

測定の流れは、1 月 1 0 日（木）の NIE における流れと同様である。

09 : 15 6 年生測定終了。

続いて、5 年、4 年、3 年、2 年、1 年の順に測定が行われていった。

11 : 10 1 年生測定終了。



【身体測定の様子】

PTTC 学生の測定を終えての感想

「子どもたちと出会い、身長や体重などを測るといういい経験ができたし、楽しかったです。先生になったら自分の学校でも試してみたいと思います。日本からの支援に感謝します。」（今年初めて参加した学生）

「昨年も参加して、日本の学生と交流していい経験や思い出ができた。そのため、今年も参加したいと手をあげた。今年も楽しかった。」（2 回目の学生）

カンボジアの先生になっていく学生のこのような気持ちをいかに広げていくかが大切だが、愛知教育大学のここまで 4 年間の取り組みが、その足がかりとなればいい。

11 : 15 後片付け。

子どもたちは、帰りの会を終え下校していく。その中には少数であるが、朝の給食の残りを持ち帰る子もいた。家に持ち帰っておなかが空いた時に食べたり、家にいる人にあげたりするとのことであった。

11 : 40 バスで昼食場所へ向かう。

12 : 00 クメール料理レストランで昼食。各自で食べたいものを注文。

昼食を取りながら PTTC 学生と談笑。各班で楽しそうに話が弾む。

13 : 45 昼食を終え、バスでバンテアイ・スレイ遺跡へ向かう。

- 13 : 55 遺跡内視察
- 14 : 50 遺跡視察後、バスで PTTC への帰路に着く。
- 15 : 45 PTTC 着。
正門前で、松本先生から PTTC 学生に身体測定講習修了証が手渡される。
その後しばらくの間、本学学生と PTTC 学生は写真を撮り合い交流。
- 16 : 00 バスでホテルに向かう。
- 16 : 10 ホテル着。この後は、各班で本日の測定データの入力と夕食。
データ入力した USB を 21 時にロビーで回収。
あすも朝が早いため、早めに休む。

1 月 1 6 日（水）はれ

- 05 : 50～ 朝食
- 06 : 30 バスでホテルを出発。
本日はアンコールクラウ小学校の児童を測定する予定。チャンセンさん、イエンさんも同行。
- 06 : 40 途中 PTTC に寄り、今日の測定を手伝う PTTC 学生 8 名、教官 1 名と合流。
アンコールクラウ小学校は農村部にある学校で、給食のない学校である。3 年前にも測定した学校である。
- 07 : 05 学校着。正門から中に入ると子どもたちが両側に並び出迎えてくれた。



【子どもたちの出迎え】

- 07 : 10 PTTC 学生と一緒に測定の準備に取り組む。
昨日同様 PTTC 学生の中には、昨年にも測定に参加した学生が一部いる。
今日は測定する子どもの数が多く、時間節約のため 2 クラスをまとめて測定の説明をすることになる。
測定の流れは、1 月 1 0 日（木）の NIE における流れと同様である。
- 07 : 30 5・6 年（5 A・6 A）2 クラスに説明開始。
- 07 : 45 2 クラス同時に測定開始（測定場所は 4 か所、1 クラス 2 か所で男女別に測定）

- 08:15 5・6年（5A・6A）2クラス測定終了。
続いて、4年、3年、2年、1年の順に午前の部の測定が同様に行われていった。
- 10:00 午前の部測定終了。
しばしの休憩後、本部になっている教室内で、データ入力作業に取り掛かる。
- 11:00 午前の部の子どもたちが下校。
- 11:20 データ入力が一段落したところで、順次昼食をとる。今日の昼食はレストラン（モイモイ）から取り寄せた弁当である。梅干しのおにぎりが入っており、おいしい。
この時間帯から午後の部の子どもたちが登校してくる。
学生たちは、登校してきた子どもたちと中庭や運動場でバレーボール、サッカー、鬼ごっこ、折り紙などで一緒に遊んでいる。



【バレーボールをして子どもと遊ぶ】

- 13:00 午後の部の授業が始まる。
- 13:10 午前の部と同様に5・6年（5B・6B）2クラスに説明開始。
- 13:20 2クラス同時に測定開始（測定場所は4か所、1クラス2か所で男女別に測定）
- 13:40 5・6年（5B・6B）2クラス測定終了。
続いて、4年、3年、2年、1年の順に午前の部の測定が同様に行われていった。
- 14:55 午後の部測定終了。
- 15:00 後片付け。
PTTC 学生の測定を終えての感想
「とても楽しかった。子どもたちの発育調査をしてもらい感謝している。先生になって、子どもの健康について知りたいときには、今回の経験を生かしていきたい。」
- 15:25 バスでPTTC に向かう。
- 15:40 PTTC 着。PTTC 学生を降ろし、ホテルへ向かう。
- 15:50 ホテル着。この後は、各班で本日の測定データの入力と夕食。
データ入力した USB を 21 時にロビーで回収。

あすは測定の最終日。あすも朝が早いため、早めに休む。

1月17日（木）はれ

06：00～ 朝食。

ホテルでは男1部屋女2部屋を確保。男女別に荷物を運び入れる。

06：50 バスでホテルを出発。

本日はPTTC 附属小学校の児童を測定する予定。チャンセンさん、イェンさんも同行。

07：10 PTTC 着。

07：25 PTTC 学生と一緒に測定の準備に取り掛かる。

昨日同様 PTTC 学生の中には、昨年も測定に参加した学生が一部いる。

今日も測定する子どもの数が多く、時間節約のため2クラスをまとめて測定の説明をすることになる。ただ、PTTC 附属小学校は午前の部だけの学校であるため、すべての測定を午前中に行う必要がある。

測定の流れは、1月10日（木）のNIEにおける流れと同様である。

08：05 1年（1A・1B）2クラスに説明開始。

08：20 2クラス同時に測定開始（測定場所は4か所、1クラス2か所で男女別に測定）

08：45 1年（1A・1B）2クラス測定終了。

続いて、2年、3年、4年、5年、6年の順に測定が行われていった。

10：30 すべての測定終了。後片付け。

10：40 3年生2クラス（3A・3B）で食まるファイブの紙芝居による食育のワークショップを行った。圓岡先生とチャンセンさん（通訳も担当）が紙芝居を担当し、食まるファイブは先生方がキャラクターを演じた。（学生は測定の後片付けを行っていたため）。子どもたちにも受けが良かった。これまで同様、紙芝居終了後、子どもたちに食まるバッジをプレゼントした。バランスよく食事ができている子どもには大きなバッジもプレゼントした。

11：15 食育のワークショップ終了。

11：40 PTTC 近くのレストラン「モイ・モイ」へ徒歩で移動し、昼食。しばし休憩。

13：15 昼食後、PTTC に戻り、後片付け。

13：35 松本先生から PTTC 学生に身体測定講習修了証が手渡される。



【身体測定講習修了証が PTTC 学生に手渡される】

学生たちはPTTC 学生と交流を深めている。

- 14 : 20 PTTC を出て、バスでホテルへ向かう。
 ホテルでシャワーを浴び、荷物整理。
- 18 : 00 ホテルを出てシェムリアップ空港へ向かう。
- 18 : 25 空港着。搭乗手続き、出国審査、手荷物検査。
 待合室で過ごす。シェムリアップ空港は年々新しくなっていく。
- 20 : 45 予定より少し遅れて離陸。シェムリアップ発・ハノイ行 ベトナム航空 VN834
 機内で夕食が出る。
- 22 : 15 ハノイ（ノイバイ国際空港）着
 乗り換えで、荷物検査がかなり混雑している。靴まで脱いで検査される。
 しばらく待合室で過ごす。
- 00 : 35 ハノイ発・中部国際空港行 ベトナム航空 VN346 機内で朝食が出る。

1月18日（金）はれ

- 06 : 10（日本時間） （現地時間 04 : 10）
 中部国際空港着。穏やかな日和である。
- 06 : 45 解団式



【解団式】

皆様、お疲れ様でした。

1. はじめに

2019 年 1 月 8 日～18 日にかけて行われた、カンボジア教育実地研修へ昨年に引き続き参加させていただいた。私は、昨年カンボジアという国の環境や人々の暮らしを自分の目で見て、様々な学びを得たとともに、カンボジアに住む人々の役に立てることをしたいという気持ちが強くなった。そこで「子どもたちの発育状況のデータを収集すること」「学校給食の重要性や食の大切さを伝えること」を通して、カンボジアの教育という面での成長を援助したいと考え、本年度もこの研修への参加を希望した。

今回の報告書では、測定を終えて感じたことや 10 日間の研修を通して感じたこと、昨年と比較して変化していたことなどを中心にまとめていきたいと思う。

2. 測定について

本研修の目的は、カンボジアに住む子どもたちの発育状況のデータを集めることだけでなく、のちに先生となる現地の学生に身体測定の方法を教えることも含まれている。しかし、日本の身体測定で用いられている身長計や体重計はカンボジアにはない。そのため、今後カンボジアで身体測定を行っていくためには、現地でも用意できるものを用いて、身長や体重の測定を行わなければならない。そこで昨年に引き続き、今年度も巻尺、重りをつなげた紐、三角定規、秤を用いて測定を行った（写真 1）。

また、本年度も体組成の測定を行った（写真 2）。本年度は体組成計を 2 台増やし、合計 6 台で行った。1.2 班で 3 台、3.4 班で 3 台という形を取り、2 班ずつ協力しながら組成計の配置などを考えた。台数を増やしたことで昨年度よりも多くのデータ収集が可能となり、より詳細な結果を得ることができたと考える。



写真 2 体組成の測定

写真 1 測定の様子

事前研修では、測定方法や測定の注意点についての確認を行い、自分たちでも実際に測定を行った。身長測定は、壁に巻尺を貼り付けて行うが、「その壁は本当に真っ直ぐなのか?」「下の方に段差がある場合にはどう貼り付けるのか?」、また、体重を測る際には「床が平行な場所か?」「めもりは0に合っているか?」といったことに注意をし、工夫しながら研修に取り組むことができた。そのおかげもあって、現地では大きな混乱もなく、スムーズに測定準備を行うことができた(写真3)。



写真3 測定場所の様子

3. 研修を通して感じたこと

今回の研修では、昨年度まで行っていた NIE 附属小学校、PTTC 附属小学校、Thlork 小学校に加え、Phum Norkor Krav 小学校でも測定を行った。

研修を通して、昨年も感じたことであるがやはり NIE や PTTC では靴を履いている子がほとんどで、全体的に身なりが整っている子どもが多い印象がある。時計やアクセサリーを付けている子も多く、特に女の子は身だしなみに気を付けている印象を受けた。

子どもたちの体格については、同じ学年でも背が高い子から低い子、痩せている子やぽっちゃりした体型の子など様々であった。

農村部の Thlork 小学校は昨年よりも履物を履いている子どもが増えたように思う。昨年はほとんどの子どもが裸足で外を走り回っていたが、今年はサンダルを履いて遊んでいる子が多かった。また、ここは給食ありの学校ということで給食を作る様子なども見せてもらった(写真4)。給食を朝早くから子どもが作る様子は変わっていなかったが、食事の中身が昨年よりも具たくさんになっており、栄養面において多少の改善が見られた。

Phum Norkor Krav 小学校は今年初めて行く学校だったため、様子がわからず少し不安もあった。しかし到着してみると子どもたちが整列して出迎えてくれたり、子どもたちの方から声をかけてくれたり、温かさを感じる学校であった。



写真4 給食を作る子どもたち



写真5 裸足で遊ぶ子ども

こちらの学校も比較的多くの子どもがサンダルなどの履物を履いていたが、Thlork 小学校と同様に裸足で駆けまわる子どもの様子もみられた(写真5)。子どもたちは楽しそうに裸足で走っていたが、土の状態を見てみると石や木の枝がたくさん落ちており、足の裏を切るといった怪我をする危険性は高いように感じた。中には、普段はサンダルを履いているが、遊ぶときや走るときはサンダルを脱ぐという子どももいた。これは、おそらくサンダルだと途中で脱げて走りにくいからではないかと考えられる。

このような環境でもとても楽しそうに走っている子どもたちの姿を見て、怪我をする危険性なく、全力で体を動かすことのできる環境が保障されている日本の環境の良さを感じたとともに、カンボジアの遊び場の環境がより良いものになってほしいと強く思った。

4. カンボジアの学生

カンボジアの学生は皆意識が高く、PTTCで行ったワークショップ(写真6)の際には細かくメモを取って記録している学生もいた。交流(写真7)の中で休日も勉強をしているという学生もいることが分かった。カンボジアの学生は学ぶことに対しての意識がとても高い。日本では義務教育があり、学校へ行くこと、教育を受けることが当たり前という環境が整っているため、学べる環境があるありがたみが薄れているように思う。しかし、カンボジアの子どもは家庭環境により働かなければならなかったり、学校数や教員の数が十分でないことから、午前と午後の二部制をとっていたり、と充実した教育を受けることができる学生は少ない。そのため、学ぶことに対しての感謝の気持ちが強く、その結果として勉学への意識の高さへと繋がっているように感じた。



写真6 ワークショップ



写真7 PTTC の学生との交流

5. 最後に

私は昨年を経験を活かし、「より多くの子どもと関わることを目標の1つとして参加をした。昨年、子どもたちと関わった中で、子どもの笑顔や無邪気さはどの国も共通していて、良い意味で子どもはどの国でも子どもだなあと感じた（写真8）。本年度もたくさんの子どもと関わり、交流するなかでたくさんの子どもの笑顔を見ることができればと思い、この目標を立てた。

追いかけるそぶりを見せれば子どもたちはワイワイしながら逃げていき、鬼ごっこが自然とはじまる。本年度も圧倒的人気を誇っていた手裏剣や紙飛行機を手にしては飛ばし始める。様々な遊びを通じて、多くの子どもと関わっていた中で気がついたことがあった。それは、話す言葉が違って「遊ぶこと」でコミュニケーションを取ることができるのだということである。「スポーツは国境を超える」という言葉があるが、それは体を動かす「遊び」でもいえることなのではないかということを知ることができた。今後は本研修での学びを活かし、体を動かすということの楽しさや良さを子どもたちに伝えていきたい。



写真 8 笑顔を見せる子ども



写真 9 本研修のメンバーとの写真

昨年に引き続きこの研修に参加できたことで、昨年とは違う視点で10日間を過ごすことができた。そして研修を通して、今後もカンボジアのために自分ができることを考え、支援していきたいと思うようになった。10日間大変なこともあったが、メンバーの皆と最後までやり遂げることができたことはとても嬉しく、充実した時間を過ごすことができたと感じている。一緒に参加したメンバーの皆さん（写真9）、事前研修からお世話になった先生方、10日間ありがとうございました。

カンボジア教育実地研修で学んだこと

教育実践研究科 教職実践専攻

大学院1年

1. はじめに

カンボジアは、内戦後の復興の中でかつての教育制度を取り戻すべく今日まで努力を続けており、教育の復興および開発に力を入れている国である。依然として教育の質など取り組むべき課題は多いといわれているが、現在の教育状況や人々の生活を実際にカンボジアの地で見ることは、カンボジアに住む人々の懸命な姿や強い想いを自分自身の肌で感じることができるチャンスであると考えた。また、本研修ではカンボジアの子どもの発育調査や食育の普及を目的としており、ここでの経験は、自らの教育観を研磨し、教育者を志す者として教育を広い視点で捉えられるようになるのではないかと考え、参加を志望した。

本研修では、実地研修に備えて事前研修をおこなった。測定方法データ入力の方法、カンボジアの基礎知識やクメール語の学習など、実地研修に向けて必要な知識や技能を事前に学び、現地で円滑な活動ができるよう準備をすることができた。以下では、事前研修を経て実際にカンボジアに行き、そこで経験したことやカンボジアの人との関わりを通して感じたことについて記述する。

2. カンボジアの学校

プノンペンではNIE 附属小学校、シェムリアップではPTTC 附属小学校、Thlork 小学校、Phum Norkor Krav 小学校の4校で発育調査をおこなった。NIE 附属小学校、PTTC 附属小の2校は、都市部にあり、Thlork 小学校、Phum Norkor Krav 小学校は、舗装されていないような道や荒地に囲まれた農村部にあった。

日本は、都市部や農村部の学校を比較しても、学校の設備などに大きな違いはない。しかし、カンボジアの都市部と農村部の学校では学校の状況や設備に違いがみられた。都市部の学校では、電気や水道などの基本的な設備が整えられていて、日本の学校と比較しても違いはほとんどなかった。その一方で、農村部にある学校では、教室には電気がなく、明かりは日光で補っていた。



写真1 学校ようす（都市部）



写真2 学校の様子（農村部）

3. カンボジアの子どもたち

どの学校の子どもも笑顔が印象的で、発育調査の際には、子ども同士で身長や体重を見せ合い、ほほえむ姿が見受けられた。また、私たちがお礼に渡す折り紙を一所懸命選ぶ眼差しからは、日本の子どもたちと変わらない子どもらしさを感じた。ただ、都市部の学校と農村部の学校との違いを感じたように、子どもたちの服装や行動においても、都市部の学校に通う子どもと農村部の学校に通う子どもの間にいくつかの違いを感じた。日本ではどこの地域に住んでいても、子どもが身に付けるものや好きなものに大きな違いはみられないし、経済状況が異なる場合においても服装やその子の体型からその家庭の経済状況を推測することは難しい。しかし、カンボジアの子どもの場合では、都市部の学校に通う子どもと農村部の学校に通う子どもでは、服装などの身なりや体型に明らかな違いが見受けられた。例えば、白くて穴やほつれのない制服を着て時計やブレスレット、ベルトなどの装飾品をつけている子、脂肪がある程度ついており健康的な体型をしている子は、都市部の学校に多く、裕福な家庭の子どもであることが推測できた。

その他にも、都市部の学校に通う子どもと農村部の学校に通う子どもとの間には異なる点があった。それは、子どもを取り巻く環境から起こる行動の違いである。都市部の学校に通う子どもは、電波やインターネット環境が整ったところに住んでいるのか、今流行しているものやおしゃれに敏感な様子が身なりや行動から感じられた。例えば、私たちが記録のために写真を撮影しようとカメラを構えると都市部の学校に通う子どもも、農村部の学校に通う子どもも喜んで寄ってきて写真に写ってくれたのだが、都市部の学校に通う子どもと農村部の学校に通う子どもとでは、写真を撮るときのポーズが異なっていた。都市部の学校に通う子どもは、おそらくインターネットやテレビなどの情報を介してさまざまな流行やトレンドを把握しているため、ピースのほかに韓国を中心に流行しているポーズであるスモールハートなど、多様なポーズをしていた。一方、農村部の学校に通う子どもは、写真を撮る際、ピースやポーズをとらないタイプの子が多いと感じた。このことから、農村部の学校に通う子どもは、写真に興味は示すものの、写真にあまり慣れておらず、写真を撮るときのポーズを知らない子どもが多数いるのではないかと推察される。

さらに、体格においても都市部の学校に通う子どもと農村部の学校に通う子どもとの間に明らかな違いがみられた。都市部の学校では子どもの体つきが良く、田舎に住む子



写真3 子どもたちのようす
(都市部)



写真4 子どもたちのようす
(農村部)

どもは貧弱な体つきをしている子どもが多いという傾向があった。その要因として、バランスのよい食事を摂取できていないことや1日に食べる食事量を十分に確保できていないことが挙げられる。その問題を解決する方法のひとつとして、私たちは食育についての紙芝居劇をおこなった。好き嫌いをせず、バランスよく栄養を取ろうという内容のものであったが、この紙芝居劇を見たことをきっかけに、少しでも多くのカンボジアの子どもたちが食べ物をバランスよく摂取し、健康的に元気よく育ってほしいと願う。

4. カンボジアの町並み

本研修では、プノンペンとシュムリアップに滞在した。カンボジアに到着して初めに滞在したのがプノンペンである。プノンペンはカンボジアの首都で、交通量がとても多いのが印象的であった。カンボジアは交通事故が多い国と言われており、道路は、自家用車と原動機付自転車であふれていて、日本とは全く異なるカンボジアの道路状況に驚いた。主要な道路は常に渋滞しており、原動機付自転車の二人、三人乗りやヘルメットをせずに運転している姿、車やバイク同士の車間距離が狭くぶつかりそうな様子など、危険なところを何度も目にした。カンボジアは今後も経済の発展が期待されており、人口及び交通量はより一層多くなっていくと予測される。交通事故によって命を落とす人を減らすためにも、より厳しい取り締まりや運転者の安全意識の向上が必要であると思った。そして、カンボジアの交通事故や減少し、人々が安心して暮らすことのできる町になってほしいと感じた。



写真5 プノンペンのようす



写真6 シュムリアップのようす

本研修の後半で滞在したシュムリアップでは、マーケットが印象的であった。マーケットは、衣服や食べ物を扱ったお店が多く、多くのお店は観光客であふれていた。さまざまな国の観光客を見かけたが、マーケット周辺を歩いていると、お店の店員さんに日本語で話しかけられることが多く、日本人観光客もカンボジアに多く訪れているということが認識できた。マーケットは、朝から夜遅くまで営業しているお店が多く、町にさまざまな装飾や電飾が施されていた点から、シュムリアップは活気にあふれた町であると感じることができた。

本研修において滞在した場所は都市部が中心であったが、バスでの移動中などに農村部のようにも垣間見ることができた。都市部のように栄えておらず、農村部は閑散とし

ていたが、とても穏やかな雰囲気ですこには都市部にはないカンボジアの良さやカンボジアらしさというものが詰まっている魅力ある場所である感じた。

5. おわりに

この研修を通してわたしは、自分の目で見て体験することの大切さを強く感じた。現代では、スマートフォンやパソコンを用いてインターネットで簡単に多様な情報を入手することができる。わたしもこの研修に参加するにあたって、インターネットでカンボジアの歴史や文化、教育事情について調べ、カンボジアについてさまざまな情報を得た。しかし、実際にその場所を見て現地の人話を聞くことで、インターネットの情報では知り得なかったそこに込められた人の思いやそこに住む人たちのようすを知ることができたと感じている。この経験は、インターネットで得た情報から学んだことの何倍も何十倍も自分の心に残る学びになったと思う。

また、この研修ではカンボジアの文化や教育について知り、日本以外の国の教育についての理解を深めることができただけでなく、日本の教育を客観的に捉えられる機会となった。カンボジアの教育環境に比べると日本の教育環境は整っているとことが分かり、日本の教育の恵まれた部分にも目を向けることができた。それと同時に、カンボジア教育の良さにも気づくことができ、朝早くから学校の掃除をする子どもたちの姿や、給食を子どもたち自身がつくる姿、学校に通うことができない子どもも多くいる中で学校に通うことを楽しみ、勉強に励む子どもたちの姿には感銘を受けた。

このことから、より世界の教育に目を向ければ、日本の教育をさらに客観的に捉えることができるようになるのではないかと感じた。世界には、日本よりも情報教育が進んでいる国や英語教育に力を入れている国などさまざまな国がある。先進国や発展途上国に関係なく、その国の教育の良さや教育に関する取り組みを世界全体で共有できる世の中になってほしいと感じた。また、わたし自身もさまざまな国の教育についての知識を持っている教師になりたいと感じた。今後は、より一層世界の教育に関心を持ち、カンボジアの教育についてもより深く理解していきたい。そして、将来教師となった際に、自らの生徒たちにもこの研修を通して体験したことやカンボジアという国の魅力を伝えていきたい。



最後に、この研修は、多くの人に支えられ無事に終えることができたと感じています。引率して下さった先生方、国際交流センターの方々、研修に協力していただいたカンボジアの方々や研修を共にした仲間、そして日本で応援してくれた家族と友人に深く感謝しています。

カンボジア教育実地研修で学んだこと

中等教育教員養成課程 理科専攻

3 年

1. はじめに

平成 31 年 1 月 9 日から 1 月 18 日にかけて実施された、カンボジア教育実地研修に参加した。これは、カンボジアの子どもたちの身長・体重・身体組成を測ることで、都市部と農村部で生活するカンボジアの子どもたちの発育調査を行うことを目的としている。カンボジアでは地域によって生活に格差が生じていることが事実である。本研修では、カンボジアの現状について確認するとともに、海外の教育・海外の子どもたちの健康状態を目で見て感じ、価値観を広げ、多面的に物事をみる能力を養うために参加し務めた。

2. カンボジアの教育の現状

調査場所順に記載する。

① NIE 附属小

NIE 附属小に通う子どもたちは、きれいな制服を着ており、きれいな靴やサンダルを履いていた。高校生や中学生の子どもはスマートフォンを持っている子がみられ、比較的ふくよかな子も在学していた。日本の子どもたちと違いがみられず、よい環境下で学習に励むことができていた様子であった。机や椅子も劣悪なこともなく、通気性や教室



の明るさにも問題ない状態で、カンボジアの暑さに適応した環境下で授業を **教室の様子** 行っていた。

また、子どもたちの中には英語を理解できる子もあり、英語がある程度小学生にも浸透しているようであった。時には、英語を理解し、簡単な英語ではあるが話しかけてくれる小学生もみられた。

加えて、しょくまるファイブでの解答用紙から判断すると、好みはよくみられたもののすべての栄養を摂取できていることが分かった。プノンペンでの NIE に通う学生は豊かな生活を送ることができているといえる。

② Thlork Primary School

これは、農村部の給食がある学校である。屋外で給食を先生と子どもたちが協力して作っていた。ここでの給食というものは、日本のように昼食を示すものではない。朝食を給食として扱っているのである。カンボジアの学校は午前中のみの授業となるため、朝食として実施している。子どもたちはみんなおいしそうに食していた。おかわりをねだる子も

いた。しかしながら、よい給食とはいえないものであると感じた。質素なものであり、汁物は魚と野菜を塩で味付けしたものであった。また、使用した食器類は自分たちで洗った。しかし、この洗浄水は決してきれいなものではなく、衛生的に良いものなのかと疑問に思った。

服装は、都市部の子どもとは異なり、使い古されたサンダルを履いている子どもが多くみられた。さらに、体つきが痩せ型で身長も低めの子どもが多くみられた。教室は外と変わらないような砂の床で、暗い教室がみられた。

食器を洗浄する水道



③ Phum Norkor Krav Primary School

この学校では、②に対して給食がない学校であった。しかしながら、②よりもかなり様式が異なり、比較的きれいな学校であった。校内は整備されており、劣悪な環境ではなく、ブランコなどの遊具やサッカー場といった運動場も整備されており、豊かな学校であるといえる。子どもたちはとても我々に興味津々で人懐っこく交流することができた。サッカー



ーやバレーボール・折り紙で遊ぶといった言語の 現地の学生とバレーボールで遊ぶ様子 壁を越えて触れ合うことができた。

また、この学校は、学校としては設備等が充実している様子であったが、子どもたちの服装などは②とあまり変化はみられなかった。特に靴はサンダルで劣化しているものを履いている子どもも多かった。他にこの学校の子どもたちは、日本の学生のように他学年に躊躇してしまうようなことはなく、みんなで仲良く交流していると感じた。これは、カンボジアの特性ではなく、日本の学生だけが他学年に対して躊躇いをもっているのではないかと感じた。

④ PTTC 附属小

この学校は、かなり豊かな学校であり、子どもたちは自分用のカラフルなリュックサックを持っているなど生活にゆとりがある様子が伺えた。校門前には移動販売車が並び、子どもたちが好きな飲み物やアイスクリームを買っていた。英語教育を行っているのか定かではないが



英語を話す小学生に遭遇し、発展している学校である 折り紙を求めて集まる小学生の様子と感じた。体つきもある程度よく、食事もしっかりと摂れているように伺えた。

○全体を通して

どの学校でも自分の生年月日を知らないという子どもたちが目立った。生年月日について重きを置かない文化であるのだろうか。また、同じ国内で会っても体つきの差や環境の違いから格差が生じていると感じた。今後のカンボジアの発展において都市部だけではなく、農村部の発展にも期待をしたい。

3. カンボジアの生活

カンボジアの生活について印象深く、特に考えたことについて記載する。

① ナイトマーケット

ナイトマーケットでの店員は、客引きを過剰なほど行っていた。これは、自分の売り上げがそのまま自分の利益になるため、客引きを行っていると分かった。また、値段交渉では、日本ではなかなか見ない光景ではあるが、カンボジアの店員にとっては少しでも売って稼ぎにしたいと考えているため、値段交渉をしているそうである。賃金が低いカンボジアの人々の暮らしにとって1ドルが大きな影響を与えているようである。そのためであるか定かではないが、マーケットの店員の努力量は素晴らしいものであると考える。それは、様々な国の人と商売をするために多くの言語を使い分けていることである。その状況に応じて瞬時に言葉を変えてコミュニケーションをとることは、非常に難しいことであるが、発展途上国であるカンボジアのマーケットのほとんどの店員が使いこなすことができていた。これは、国際的になった今、日本のみならず、世界各国の人々はこの学習意欲に見習って懸命に努めていくことが大切であると考ええる。

② 韓国とカンボジア

我々が活動をしていた9日と10日に、韓国の学生ボランティアの二人がカンボジア内で食中毒によって死亡したことや、14日に別の韓国ボランティア団体がカンボジアで提供した昼食によって大人数の児童らに食中毒が起きるなどの事件が生じた。我々には直接的な影響はなかったが、カンボジアでの衛生面での課題を感じさせる問題であるといえるであろう。カンボジアは、都市部は日本を超えるほど発展上昇しているが、衛生面や環境面では現地の人であっても危険と隣り合わせである。食事には細心の注意を払い、必ず火の通ったものを食べ、生食をしないようにすることが重要であると考ええる。

4. 日本から持って行って重宝したもの

日本から持って行って重宝したものに関して以下に記す。

① 酒精綿・除菌シート

皿やフォーク・箸などを拭いて使用した。感染症や下痢などの予防に活躍した。

② サングラス

強い日差しを緩和するために使用した。また、砂ぼこりから目を守るためにも活躍した。

③ 制汗スプレー・制汗シートなど

測定や観光地巡りなどの屋外活動の際に使用した。温度を下げたり，汗を拭きとったりして使用した。

④ ファブリーズ

服を除菌するためや洗にくい靴などに活用した。また，部屋の臭いにも効果的であった。

⑤ 虫よけスプレー

蚊などによるデング熱等の予防のために活躍した。

⑥ 日焼け止め

強い日差しから火傷を防止したり，日焼けを防いだりするために活用した。

⑦ 輪ゴム

旅行カバンに服などを丸めて入れるときに活躍した。小さくしてスペース確保することが可能になった。

⑧ ティーパックやポカリスエットの粉

シェムリアップでのホテルのおいしいとはいえない水や水に飽きた際に活用した。ティーパックは入れておくだけでよいため便利であった。



①酒精綿



②サングラス



④ファブリーズ



⑧ティーパック

5. まとめ

カンボジアの教育や生活は日本と比較すると確立されていない点や支援が必要な点は多い。また，貧富の差や衛生面の問題が大きく，生活に苦しむ人がいることも現状である。そのようなまだまだ発展途上とされている中，研修を通して，多くのことを学んだ。人との交流をたくさん経験したことにより，言語は異なっていたが，その壁を乗り越え，生活・環境や価値観・考えなど日本では知りえなかった世界を感じることができ，多面的に物事をみる，視野を広げる能力を養うことができた。

このカンボジア教育実地研修で学んだことを活かし，日本とカンボジアの明るい未来に向けて努めていきたい。

カンボジア実習で学んだこと

中等教育教員養成課程 数学専攻

3年

1.はじめに

私がカンボジア研修に参加しようと思ったのは、直感だった。なぜだか、カンボジアに行ってみたくて、ワクワクしていた。カンボジアの言葉も、気候も、環境も、何もよくわからないまま、特に何も調べないまま、当日を迎えた。(本当は、美味しいお店だけは調べました。)

2.カンボジアの歴史について

1953 年、カンボジアはフランスから独立した。1968 年、クメール・ルージュ勢力主導(クメール・ルージュはのち 1975 年から 1979 年までカンボジアを支配する政党、党首はポルポト)の武装組織が現れ、武装蜂起を起こした。この革命はゆっくりとしたものだったが、その中で、人口がまばらな北西部を中心に活動の地盤を固めていった。

1970 年 3 月、世襲のカンボジア王家出身の国家元首「ノロドム・シヌハーク」が国外にいる間について、「ロン・ノル」が首謀者として軍事クーデターを起こし、シヌハークの政権を倒した。そして、このクーデターに続いて勃発した内戦では、元国王シハヌークはクメール・ルージュと手を組み、ロン・ノルはアメリカと手を組んで戦った。この内戦は国内を大混乱に導いた。まず、クメール・ルージュ軍とロン・ノル軍はともに、大量虐殺を行ったといわれている。それと同時に、カンボジアに逃げ込んでいた北ベトナム軍およびベトコン軍を攻撃するため、約 7 万人の米軍と南ベトナム軍兵士が国境を超え、カンボジアに乗り込んできた。(当時、アメリカはベトナム戦争中であった) 4 年間に米軍機は、太平洋戦争で日本に投下した爆弾の三倍以上、50 万 t もの爆弾をカンボジアに投下したといわれ、およそ 200 万人が国内難民になったと推定されている。この被害に加え、ロン・ノル政権は汚職が蔓延しており、都市部しか制圧できておらず、シハヌーク元国王は一定の人氣があったなどの理由で、1973 年 8 月に米軍の爆撃作戦が終了する頃には、クメール・ルージュ軍は国土の 75%を支配した。1975 年 4 月 17 日最終的に内戦に勝利し、戦いは終結した。この内戦中に約 50 万人の国民が亡くなった。

その後すぐに 250 万人のプノンペン(首都)市民を強制移住させた。公務員、医師、教師など職歴がある者は財産を没収され、農業に従事させられた。仕事について不満を述べた者、食料を隠した者、規則を破った者は s-21 などの強制収容所に入れられ、拷問を受けた後に処刑された。この時代、集団墓地は栄養失調や過労、不適切な医療行為によって死亡した何百万人の遺骨であふれかえっていた。加えて、ポルポト政権下では、

- ・金銭、私有財産、宝飾類、ギャンブル、ほとんどの書物と宗教は禁止。
- ・子どもたちは家族の元から引き離されて軍隊に入れられていた。

- ・男女関係や言論の自由、衣服についても厳しい規則が定められた。
- ・情感を表すのも難しかった。

このように、個人の生活は国による支配を受けていた。

一方、ベトナムとの国境地帯では、小競り合いが激化。1977年に国境を断絶。1978年、ベトナムと反ポルポト派の政治的軍事的組織「カンプチア救民族統一戦線」は、カンボジアへ侵攻していく。1979年、カンプチア救国民族統一戦線はベトナムの支援を受け、プノンペンに入り、ポルポトは崩壊した。

3.S21について

ポルポト下の共産体制においては、完璧な農業社会が理想とされ、農民は「皆が熱心に真似るべき伝統的な田舎生活を導く人間像」として示された。その結果、教養のある者、事業や工場を所有している、メガネをかけている、外国語を話せるといった理由で国民は殺されていった。また、障がい者、病気の人、身体的に弱い人、年寄りなどもたびたび排除された。村と刑務所には、処刑所があった。処刑された者のほとんどは弾の節約のために棒かクワで頭を思い切り叩かれて殺されたという。そして、S-21では、



- ・下着など全ての衣類を脱がされた
- ・独房の中では看守の許可が無くては動くことも困難だった
- ・赤ちゃんを抱えていた場合、赤ちゃんは木にたたきつけられて殺されていた

というような残虐行為が行われていた。

内乱を含め、200万人もの人が亡くなったと推定されている。

たった数十年前に起きたこととは、思えなかった。そのまま残されていた S-21 は、見るのが辛くて、苦しくて、目をつむってしまいたかった。その場から逃げ出したくなった。でも、見なくてはいけなかった。私のために、ここで、命を落とした人のために。あの日々を生きた人たちは今日という未来を想像できただろうか。今日、カンボジアの思い出を胸に生きていく私は、ほんの少しでも、あの日々を生きた人たちを、幸せにできていることを願った。

4.身長、体重測定について

4つの小学校で、子どもたちの身長と体重、体脂肪や、骨密度などを測定した。都市に近い学校と、都市から離れている学校では、子どもの体つきに違いがあるような気がした。都



市から離れている学校では、低学年は特に、ほとんど体重、身長の違いがないように感じた。逆に都市に近い学校では、高学年が特に、体重、身長の違いが大きいように感じた。肥満の児童もいた。私が訪問した学校には、栄養失調の子どもはいないように感じた。学校には、小さな売店があり、子どもたちはそこでアイスや飴などを買い、食べていた。都市から遠い学校で靴がない子どもはちらほら見かけたが、服はみんな着ていた。学校に行って驚いたことがある。それは、20歳の小学6年生がいたことだ。この例に限らず、カンボジアの学校では、学年が一緒でも年齢がバラバラだった。また、目が見えない児童、障がいを抱えている児童もいた。日本の当たり前が、カンボジアの当たり前でないこと、カンボジアの当たり前が日本の当たり前でないことが、新鮮だった。しかし、どの国の子どもも、学ぶことが大好きで、笑顔がキラキラしてて、可能性が詰まってるな、と感じた。

5.食育について

子ども達に食育のワークショップを行なった。栄養素がわかる劇をし、通訳をしてもらい、最後には好きな栄養素にチェックしてもらった。「私たちは、小さい頃から給食を食べ、養護教諭の先生から食事についてのバランスについて教わった記憶



があり、多くの人がバランスよく食べるという意味がわかると思う。しかし、カンボジアの子どもは、バランスよく食べるという意味が分かっていないような気がした。栄養素を5つ知ってもらい、全てを好きになってもらうことから始まると思う。その後に、栄養素同士のバランスや、量を考えることができるようになると思う。そういった意味で私たちのワークショップは、栄養素を知ってもらい、全ての栄養素を好きになってもらう目的は、達成できたように感じた。好きな栄養素についてひとつバッチを渡した時に、子ども達はとても喜んでいて、バッチを大切に付けていた。毎年研修を行なっているため、来年はもう少し踏み入った知識を子どもに身につけてもらえたらと感じた。

6.カンボジアの大学生について

小学校の身長、体重、体組成を測定するにあたって、現地の教員を目指す大学生とともに活動した。カンボジアの大学生は、英語がとても上手で、私は理解できないことが多々あった。また、私たちが身長、体重、体組成の測定方法を説明した時も、すぐ理解をしてくれて協力してくれた。カンボジアで大学に行けるのは、1パーセント程度だと聞いた。裕福でない学生も多いという。また、土日勉強していると、学生は言っていた。私の偏見にまみれたカンボジアの学生の



イメージとは真逆だった。肩書きやイメージで物事を判断してしまっはいけないと思う。また悪意がなくても、知らず知らずに自分の中で勝手に判断していることが多くあると気付いた。カンボジアの学生は、そんなことまでも私に教えてくれた、大切な出会いだった。

7.まとめ

外国に行った人から「価値観が変わるよ」という言葉をよく耳にする。実際、私は、「価値観が変わった！」と言えるほどではなかった。違う国に行っても、教員を目指す学生がいて、学んで遊ぶことが大好きな子どもがいて、日本に歴史があるように、カンボジアにも歴史が



あった。でも、日本では感じなかった感情が、気づきが、たくさんあった。物にあふれている日本だが、本当に必要なものは多くないと思った。「気を付けていつてきてね」と言ってくれる人の、帰る場所があることの、大切さが身に染みた。辛い、苦しい、そんな感情を味わえることさえ、幸せだと思った。同じ言葉で伝え合える便利さを知った。しかし、言葉でなくても、伝え合えることがたくさんあった。カンボジアに行っ

たことは、もう過去のこと、思い出は毎日薄まってしまふけれど、あの時の感情が、少しずつ形を変え、色を変え、私の中にあるのを感じる。全部、私だけのものにしてしまわないように、閉じ込めてしまわないように、していきたいと思う。

カンボジア教育実地研修 報告書

初等教育教員養成課程 保健体育選修

3年

1. はじめに

私が今回このカンボジア教育実地研修に参加しようと思ったのは、昨年度のこのプログラムに参加していた先生や先輩からお話を聞き、カンボジアという日本と違った環境の学校の状況や教育現場を実際に見て、教育の視野を広げたいと考えたからである。また、カンボジアの教育を支援できるという貴重な機会で、多くのことを学び、何らかの形でこれからの自分の生活に生かすことができたと思い参加した。

2. 学校・測定の様子

プノンペンではNIE、シェムリアップに移動してからは Thlork 小、Phum Norkor Krav 小、PTTC 附属小で子どもたちの発育に関する調査と、食育のワークショップを行った。都市部の学校と、農村部の学校とを比較すると、学校の状況も子どもたちの様子も大きく異なっていて、日本では感じる事のない国内における貧富の差を感じた。

◇NIE

プノンペンの都市部にある NIE は、最初に訪れたカンボジアの学校ということもあって、自分が想像していたよりも綺麗であった。子どもたちは全員が制服を着て、靴やサンダルを履いており、時計やネックレス、女の子はピアスなどの装飾品をつけている子もいて驚いた。

実際に行う初めての測定ということで、最初はミスのないように気を付けながら、確実に行った。慣れてからは現地の学生さんとも協力して、測定をスムーズに進めることができた。やせ型の子どものばかりを想像していたが、体の大きな子どもも見られた。

NIE では食育のワークショップも行った。子どもたちは興味をもって、積極的に参加してくれていた。カンボジアの子どもたちの好きな食べ物の分類は、肉や魚などのグループや、お米や麺類などのグループが人気で、日本の子どもたちと共通する部分ではないかと思った。



図 1 NIE の子どもたち

◇Thlork 小

比較的田舎にあるこの小学校は、学校の近くに野犬がいたり、学校の裏には草原が広がっていて野生の動物がいたり、日本では考えにくい環境であった。自分の体に合っていないような大きな自転車に乗って、登校してくる子どもの姿も印象的だった。

私たちが到着すると「幸せなら手を叩こう」を日本語や英語など 4 か国語で歌って出迎えてくれ、子どもたちの日本語での歌に感動した。

子どもたちの体は、都市部の子どもたちと比較すると小さく、肥満傾向の子どももあまりいなかった。

この学校で特に印象的であったのは、朝食の給食である。子どもたちは登校し、掃除をした後、朝食として給食を食べていた。子どもたち自身が慣れた手つきで給食を作っている様子は日本では考えられない新鮮なものであった。余っていた分をすこしいただくと、味はおいしく食べやすいものだった。先生方の話によると、今年のもは肉が入っているなど、来るたびに子どもたちの健康を考えられたものになってきているとのことだった。少しずつではあるが、食の大切さの考えが浸透し、豊かな生活になっているのではないかと考えられる。



図 2 給食を作る子どもたち

◇Phum Norkor Krav 小

この小学校の子どもも、都市部の同年代の子どもと比べると体が小さかった。ここでは、子どもたちと触れ合う時間があつたので、バレーボールをやったり、子どもたちに連れられてサッカーをしたり、カンボジアの伝統の遊びである、日本という蹴鞠のような羽根を蹴って遊ぶ「サイ」をしたりして過ごした。貧富の差がある中で、子どもたちに親しまれているスポーツは、やはり用具が少なくて済むサッカーやサイなどであると感じた。



図 3 子どもたちとバレーボールをする様子

◇PTTC 附属小

この小学校は、シェムリアップの都市部あり、子どもたちの体は農村部と比べて大きく、背が大きな子どもも肥満傾向のある子どもも見られた。この学校には、制服を着て

いる子どもと体操服のようなものを着ている子どもがいて、カンボジアの体育科教育はどのようなになっているのかについて知りたかった。

個人的に、印象的だったのは私たちが測定しているところに来た子どもに視覚障害を持った子どもがいたことだ。ほかの学校では特別支援の対象になっているのかわからないが、自分がカンボジアにいる中で一人しか見られなかった視覚障害を持つ子どもに出会い、カンボジアにおいても普通学校における特別支援教育のようなものが行われているのか、と考えるきっかけとなった。

◇現地の学生について

測定を共に行った現地の学生は、自分たちよりも英語によるコミュニケーションに長けており、積極的にコミュニケーションをとってくれて、測定だけでなく多くのことを共に学ぶことができた。私たちのワークショップの内容について、細かくメモを取っている姿勢や、実践している様子、直接測定とは関係のないコミュニケーションを通して、教員という同じ志を持った現地の学生たちは多くの刺激をくれた。

3. カンボジアでの生活

カンボジアに到着してホテルに向かう時点で、交通の状況や街並み、道路等のインフラが日本と違うということを実感し、正直不安も多かったが、大きな事故等もなく安全に充実した日々を過ごすことができた。プノンペンとシェムリアップを拠点として滞在をする中で、どちらの街も機会があればもう一度訪れたいと思うところばかりであった。特にシェムリアップのパブストリートやナイトマーケットは、自分の思っていたカンボジアのイメージが大きく変わる程の衝撃だった。多くの観光客が訪れるこの街はとても発達した素敵な町だった。

カンボジアの観光で、印象に残ったのはやはり世界遺産のアンコール遺跡群であった。教科書でしか見たことのない遺跡について、ガイドさんの説明を聞きながら見学していくのは、カンボジアの歴史についてより詳しく知ろうと思うきっかけになった。それらの遺跡はもう一度じっくり訪れたいと思うくらいの素晴らしさであった。同時に、日本の歴史や遺産についてしっかりと把握して外国の人に伝えられることの大切さを学んだ。



図 4 パブストリートの夜



図 5 アンコールワットでの集合写真

4. 最後に

この研修に参加して、自分が当初思っていた以上に学ぶことが多くとても充実した時間を過ごすことができて、参加して本当に良かったと感じた。実際にカンボジアで生活をする中で、日本であたりまえのように感じている、食事やトイレ、道路や施設の整備、ごみのない街が世界と比べるととても素晴らしいものであり、学校環境も電気やクーラーなどが設置されていて、机や教科書が充実していることがいかに勉強に集中できるように工夫されているのかを知った。

また、この研修を通して、子どもの笑顔を見ることのできる教員という仕事の素晴らしさを感じることができた。元気な子どもたちの笑顔はハードな日々を過ごしている自分たちの疲労を忘れさせるほどであった。言葉は通じなくとも、子どもたちにもらう力は素晴らしかった。

あっという間に終わってしまったこの研修を通して学んだことを今後の生活や、教員になった時に何らかの形で生かせることができたと思う。

いろいろなことで支え合った仲間たちや先生方のおかげで充実した日々を過ごすことができました。本当にありがとうございました。



図 4 笑顔の子どもたち

カンボジア教育実地研修で学んだこと

初等教育教員養成課程 情報選修

3 年

1. はじめに

平成 31 年度 1 月 9 日から 18 日の期間でカンボジアでの教育実地研修を行った。今回カンボジア教育実地研修に参加しようと思ったのは、小学生の頃に見たテレビ番組でカンボジアの教育について取り上げているのを見て、自分もカンボジアの教育に協力したいと思ったからだ。今回の研修を通して日本との違いや様々な文化について学ぶことができた。

2. カンボジアの子どもたち

私はカンボジアの子どもたちのほとんどがしっかりとごはんを食べることができない現状にいて痩せている子がほとんどであるというように考えていた。でも、実際は体の大きい子どもたくさんいて、想像していたよりカンボジアは発展が進んでいるように思った。しかしながら、都市部に比べると農村部の子どもたちは比較的大きい子も数少なく痩せている子がほとんどであるのが現状であった。特に調査をしている中で昨年より身長が 1cm ほどしか伸びていなく体重もほとんど変わっていないような子どももいた。しっかりとバランスのとれた食事ができていないことがこのような結果につながっているのではないかと考える。

そして、カンボジアの子どもたちは授業に対して積極的であると感じた。授業の風景を見ていてもとても楽しそうにやっている子ばかりであった。日本では授業を受けることが当たり前であるがゆえに授業にまじめに取り組まない子どもがいると教育実習を通して感じていた。カンボジアでは電気がない学校があり、太陽の光だけで授業をしていて、光が出ない曇りの日などは授業ができないと聞いた。勉強したくてもできない子どもがいる中で日本はなんて恵まれた環境なんだろうと感じた。

また、カンボジアの子どもたちは笑顔にあふれているという印象を受けた。いつでも笑



写真 1：授業の様子



写真 2：子どもたちの様子

顔で話したり、遊んだり、授業を受けているように感じた。その様子を見て私は、心が温かくなり、子供たちのためにできることをもっとたくさんできるといいなと思った。

3. 食事

カンボジアでの食事はいつでも食器をきれいにすることから始まった。食器をよく見ると「ほんとに洗ったの？」と思うような食器が多くあった。コメが付いたままのものもあったり汚れているものあったり、衛生的にやはりしっかりと食器を除菌しなければ自分の体調を崩すことになるというように思った。カンボジアにいる期間中に腹痛により亡くなった韓国の学生がいるということを聞いてよりいっそう、除菌することの大切さを感じるようになった。日本では食器をきれいにすることを気にもしないのはなぜかと考えると日本はそういうところにとてもしつこいところがあるのだろうと思った。日本は非常に安全を考慮されており、守られているように感じた。カンボジアに行き、自分の身を自分で守らなくてはならないというように考えるようになった。

カンボジアでの食事はクメール料理だけでなく、中華料理やベトナム料理、日本食など様々なものをいただいた。また、バイキング形式の時も結構あったので、おなかがパンパンになるくらいまで食事をしたことも多くあった。私はその中で、パンケーキという料理がとてもおいしかった。パンケーキは日本のパンケーキのようなものではなく、クレープの生地のようなものに、肉を炒めたものを挟みさらに野菜を挟んで食べるものであった。食べ方はよくわからなかったが、非常に自分の口にあっていておいしかった。一方で、口に合わない料理もあった。クセのあるにおいや味のするトムヤムスープ、香辛料を多く使っている料理の数々だ。ほんとにクセが強く食べるのに時間がかかり、少し残してしまうこともあった。

私は毎晩、ビールを飲んでいて。なぜなら、ビールは普通の飲み物に比べて単価が安かったからだ。シェムリアップのパブストリートでは、コーラ（約1ドル）などより、ビール（約0,5ドル）の方が安く、お金があまりなくなってしまった私には、とてもありがたいことであった。そのおかげで私は、ビールが苦手だったが好きになって日本へ帰国した。日本も比較的安い値段で提供してくれれば



写真3：パンケーキ



写真4：バイキングの様子

と思うところがあった。また、日本のビールに比べ、カンボジアのビールはフルーティーな感じがして飲みやすかった。

4. カンボジアの街

カンボジアの街はいろんなところで工事が行われているという印象がある。プノンペンホテルから外を見ると目の前に工事現場があった。都市開発が進んでいることを物語っているように思う現場であった。

道路は、右側通行で日本では見ないようなトゥクトゥクという乗り物やバイクに三人のり、ノーヘルでのバイクの運転など日本との違いが多くあった。バイクの交通量がとても多く車がかわいそうなくらいであった。一番驚いたことは、中央線がない道が非常に多いことだ。日本は基本的には中央線がありしっかりと分かれているがカンボジアはないところが多いのですごい自由に追い越したりしていた。あの状況で交通事故が頻繁に起こらないのが不思議に思った。譲り合いの精神が強く優しい心の人が多いからなのかと思った。日本ではきっちりと決められた道路で安全と思われるが事故が多いのは譲り合いや思いやりが足りないからだと思う。環境が整うのはいいことだが、大切な心を忘れてはいけないと感じた。

ナイトマーケットでは多くのお店があった。多すぎる店で何がどこにあるか、今自分たちがどこを歩いているかわからないときがしばしばあった。また、同じようなものでも店によって値段が違うことが多くあり値切ることも体験した。現地のお店の人には英語も日本語もできる人が多く、コミュニケーションが豊かであった。そういう人とのかかわることもできて非常に有意義な時間を過ごすことのできたナイトマーケットだった。



写真5：パブストリート



写真6：車とバイクとトゥクトゥク

5. おわりに

今回の研修で本当に多くの貴重な経験をすることができた。日本との違いを感じて良い面も改善すべきではないかと思うことも見つけられた。歴史的な遺産も見て、驚きやうれしさも感じることもできた。子どもと遊んだり、簡単なコミュニケーションをとり、触れ合う中で子どものことが好きであることも自分の中で再確認することができ、教員になりたい気持ちが強くなった。

最後にこの研修は多くの先生方、国際交流センターの方々、多くの方のサポートがあって成り立っている。その方々への感謝を伝えたい。ありがとうございました。



写真 7：集合写真

カンボジア教育実地研修で学んだこと

現代学芸課程 国際文化コース

3年

1. はじめに

平成31年1月9日から1月18日の10日間にかけて実施されたカンボジア教育実地研修の一員として参加させていただいた。この研修に参加したいと思った理由は、カンボジアという国やカンボジアの教育について知りたいと思ったからである。カンボジアについて何人かの知人からカンボジアを訪れたときのことを聞いたことはあった。しかし、私自身、カンボジアを訪れたことがなかったため、今回のカンボジア教育実地研修では様々な発見があった。この報告書では、カンボジア教育実地研修で学んだことについて述べていく。

2. カンボジアの学校

カンボジアの学校では学校の付近に近所の人が営む売店があり、子どもたちが売店で買ったものを休憩時間に食べている姿が見受けられた。また、校庭に犬や鶏がいる様子、まだ学校に通っていない幼い子どもが兄弟がその学校に通っているからという理由で学校の中で遊んでいるということも日本の学校ではめったに見ることができないだろう。

また、私たちが訪れた中の1つの学校では給食があり、朝早くから給食の準備として、鍋を混ぜたり、食べ物をクラスごとに分けたりをしている子どもたちを見ることが出来た。

写真1 学校の近くの売店



子どもたちは始業前に教室の前でみんなで各自が持ってきた皿によそってもらった給食を食べていた。日本では、給食といえどお昼ご飯のことを指すが、今回訪れた学校の給食は子どもたちの朝ごはんである。日本の学校の始業時間は8時過ぎであるがカンボジアの学校の始業時間は

写真2 給食を配膳する様子



日本よりも早く、7時台であるため、給食の準備をしている子どもたちは何時から準備をしているのだろうかという疑問に思った。

写真3 給食をつくる子どもたち



3. 測定について

日本では身長や体重を図るときに身長計やデジタル表示の体重計を使っている。しかし、カンボジアにはそのような身長計やデジタルの体重計はないため、今回の研修中の測定の際にはそのような機械は使わなかった。その代わりに巻き尺、錘、紐、教師が授業をする際に使う大きな三角定規、足形、秤などのカンボジアでも用意のできるような道具を使って測定を行った。このようにカンボジアでも用意のできるような物を使って測定の仕方を広めることでカンボジアの人たちが身体測定を行えるようにするといったねらいがある。愛知教育大学の職員方と学生がカンボジアに毎年このように測定をするためにカンボジアに訪れ、カンボジアで教員を目指す学生に身体測定の仕方を教えながら一緒に測定をすることがカンボジアでの身体測定の方法の普及に繋がることはとても嬉しいことである。しかし、私を含め、この研修に参加する学生のほとんどが錘や三角定規を使って身体測定をしたことがなかったため、事前研修で測定方法について学んだ。研修中にはたくさんの子どもたちを測定することが必要とされていたため、事前研修で測定方法に学んでいなかったらスムーズに測定をすることは難しかっただろう。

また、身体組成は日本から持ってきた体組成計を使って測った。カンボジアでは体組成計を見かけることが無いからか体組成計に興味深々の子どもたちが多かった。子どもたちだけではなく、私たちの測定のお手伝いをしてくださったカンボジアの学生も体組成計に興味津々で、測定結果を熱心にメモしている姿が多く見受けられた。



写真4 測定の様子

4. しょくまるファイブを使った栄養教育

私たちは学校を訪れた際に「しょくまるファイブ」という愛知教育大学のオリジナルキャラクターを使って栄養バランスを良く食べる大切さについて教える出し物を行った。日本では野菜が嫌いな子どもたちが多いため、きっとカンボジアの子どもたちも野菜が嫌いな子が多いのだろうと思っていたが意外にも思っていたより野菜が嫌いな子どもたちは多くなかった。この「しょくまるファイブ」を使ってカンボジアの子どもたちに出し物をするにあたって、カンボジア版の原稿や絵が考えてあり、カンボジアで良く食べられて



写真5 「しょくまるファイブ」
を使った出し物の様子

いる食材を例に出して説明を行っていたため、カンボジアの子どもたちにより伝わりやすかったのではないかと思います。

5. カンボジアの学生との交流

カンボジアではクメール語、日本では日本語を使うため英語はどちらの学生にとっても母国語ではない。しかし、コミュニケーションをとるためにお互い母国語ではない英語を使った。ジェスチャーや写真を見せたりして伝わることもあった。一緒にお昼ご飯を食べながらお互いの国について話したりし、カンボジア学生との交流の中でカンボジアについて得る情報も多々あった。英語によって異なる言語を母国語とする人々とコミュニケーションをとることができ、情報を得ることができた。もっと英語を話すことができれば、より円滑にコミュニケーションを取ることやより多くの情報を得ることが出来るだろうと感じた。このことは今後の英語学習へのモチベーションに繋がるだろう。

6. カンボジアの都市部と農村部

私たちは研修中にプノンペンとシェムリアップにある学校を訪れ、子どもたちの測定を行った。研修の中では4つの学校を訪れた。都市部にあり学校と農村にある学校の双方を訪れたため、都市部に住んでいる子どもたちと農村部に住んでいる子どもたちとの違いを感じた。農村部に住んでいる子どもたちの中には股の部分が破れているズボンをはいている子やぶかぶかのズボンをベルトを使ってはいている子、背の高さにあっていない大きな自転車で通学をする生徒が見られた。測定をしている中で、農村部より都市部の学校に通う子どもたちの方が肥満の傾向がある子が多いように感じた。

また、町の様子も都市部と農村部では大きく異なっていた。カンボジアの首都であるプノンペンは交通量が多く、イオンまでもあり、私が想像していた以上に近代化が進んでいた。東南アジアといえばバイクが多いイメージだったがプノンペンではバイクだけではなく、車の交通量も多かった。交通状況を観察してみると日本ではほとんど見ることがない交通の様子が見られた。車に荷物をたくさん載せすぎてトランクがしっかりしていない車や3人以上人が乗っているバイクがいるのだ。しかも、そのような車、バイクは1台だけではなく複数いた。日本では当然あり得ないだろう。

写真6 都市部の道路の様子



プノンペンからシェムリアップに向かう途中では町の様子が都市っぽい様子からだんだんと農村部っぽい様子に移り変わっていくのを感じた。都市部の道路は日本と同様にアスファルト舗装されていたが農村部の道路はアスファルト舗装されていなかった。また、都

市部と比べて農村部では車を使っている人をあまり見かけなかったように感じた。このように都市部と農村部の双方を訪れてみて都市部と農村部の差を感じた。もし、プノンペンだけしか訪れていなかったら、カンボジアは思っていたより近代的であったという印象になってしまっていたかもしれないと感じた。カンボジアの都市部と農村部の双方を訪れることができ、とても有意義であった。

7. 最後に

今回のこの研修ではこのレポートには書ききれないほどの新たな発見や学びを得ることができた。この研修に参加することができて本当に良かったと思う。カンボジアの学校を訪れて現地の子どもたちと触れ合ったり、現地の学生と交流したりすることができたのはこの研修に参加したからこそできた経験であるだろう。また、カンボジアは、まだ発展途上のイメージで、近代化は全然進んでいないだろうとカンボジアに行く前は思っていたがカンボジアの近代化の面も見ることができた。やはり自分の目で実際にみるということはとても重要なことだと感じた。異文化を体験する中で自分の育ってきた国と比較をしてしまうこともあるが自分の知らない文化があることを知り、このような文化があるのだということを受容することは大切なことなのではないかと感じた。

このカンボジア教育実地研修が少しでもカンボジアの教育、子どもたちの役に立っているならば良いと思う。今回の研修は私にとってとても貴重な経験となった。この研修でお世話になった大学職員の方、先生方、そして学生 みなさん本当にありがとうございました。



写真7 アンコールワットの前で撮った集合写真

カンボジア教育実地研修 ～感じた教育の大切さ～

養護教諭養成課程

3 年

1. はじめに

私がこのカンボジア研修に応募した理由は、小学生の身体測定の結果をデータとして残すことで、カンボジアの小学生の健康を高める活動に寄与したいと思ったためである。加えて、カンボジアの小学校を自分の目で見て子どもたちと触れ合ったり、教員養成所の学生とコミュニケーションを図ったりする等、多くのカンボジアの人たちと実際に会って、話して、関わってみたいと思ったためである。感じたことや経験を養護教諭養成課程出身の一人としての活動や自身が所属する NGO 団体における今後の活動に生かし、日本とカンボジアをつなぎ、互いの良さを取り入れ、協力していくことで、学校保健や教育の発展に貢献したいと考えた。



写真 1 小学校 給食を受け取る子どもたち

2. 小学校での身体測定

現地の教員養成所である NIE や PTTC の学生と協力して首都のプノンペン州、世界遺産で有名なシェムリアップ州の小学校 5 校において測定を行った。身長と体重の測定は、調査に赴いた小学校の小学生全員に対して行い、体組成の測定は時間の都合上一部の小学生のみに対して行った。測定は現地の NIE と PTTC(教員養成所)の学生と協力して行い、カンボジア語の通訳の方にも協力していただいた。



写真 2 小学校での身体測定

〈測定の手順〉

手順は効率をよくするために途中で変更がなされた。以下に示すのはより効率的に実施できるよう改善が図られた結果の手順である。また、グループに分かれてからの実際の測定については各グループによって測定方法が異なる。ここに記載する方法は 1 班の測定方法である。

測定用具の準備と設置が完了したら、小学生を2クラスずつ召喚し、まずは一斉に身体測定の手順について日本の学生の代表者がイラストを用いて説明を行う。その後、実際の測定に移る。各グループがそれぞれ1クラスの男子もしくは女子の測定を担当するため、子どもたちを誘導し、4つのグループに分ける。(グループのメンバーは日本の学生3~4人、現地の学生2~3人、通訳の方1人である。)小学生を4グループに分けた後、①身体測定の結果の記録用紙の名前や生年月日、年齢を確認する。(①については、カンボジア語が話せる人が行う必要があるため、現地の教員養成所の学生や通訳の方をお願いした。)②身長、体重を測定する。③アクセサリなどを外して手足の汚れをぞうきんやウェットシートで拭き、体組成を測定する。(一部の子どものみ。)④身長、体重(、体組成)の測定が終了したら、調査用紙とともに測定が完了した小学生の写真を撮り、記録に残す。⑤最後に、小学生に折り紙を渡す。このような手順で測定を行った。

〈測定に用いた道具〉

身長の測定には日本で使用している身長計ではなく、メジャーと鉛直を示すためのおもり、黒板用の大きい三角定規、フットプリントを用いた。また、体重の測定には、現地の量りを用いた。これは、将来的にカンボジアの教師や学生のみで身体測定を行うようになった際に、道具が十分ではない中でも現地で調達可能な道具を用い、工夫して測定を行えるようにするためである。日本からの継続的な支援というのも大切だが、カンボジアの人々が日本の身体測定の方法などを取り入れながらも現地に合った方法を確立し、実施していくことができるようにすることも重要であると理解した。

〈所感〉

裕福な子どもが多いと聞いていた都市部の小学校には、一目見ただけで肥満とわかるような子どもがいたことが私にとって衝撃的であった。カンボジアへの訪問は2回目であったが、前回は農村部の貧困地域への訪問がメインであったため肥満の子どもに出会うことはなく、やせの子どもが多い印象を持っていたためである。都市部と農村部との格差を感じた。都市部、農村部に限らずすべての子どもがより質の高い学校



写真 3 NIE 学生との交流

保健や教育を提供されるようになることを願い、自分にできることを探していきたい。また、それぞれの地域の課題を適切に把握し、地域に合った支援を考え実行していくことが大切であると実感した。例えば、農村部においては、特に衛生的な環境を作ることや手洗い等の指導等が必要であり、都市部においては、糖分の取りすぎに注意しバランスよく食

事を取るものの必要性等を教える食育が必要だと思う。

また、測定を通して PTC や NIE の学生と交流ができたことはとても良い経験となった。彼らの教師になりたいという思いや、実際に子どもを相手にしている姿に刺激を受け、自分自身を見つめ直すきっかけとなった。

3. トゥールスレン博物館

たった 40 年ほど前に起きた出来事であるとは信じがたい光景を目の当たりにした。トゥールスレン博物館は 40 年ほど前まで政権を執っていたポルポト率いるクメールルージュによる政策下で、国民が収容され、虐殺も行われていた刑務所である。クメールルージュという政治勢力は初期にはベトナム戦争からの解放をもたらしたとして、国民に希望を与える存在であったが、原始共産主義(国民全員を農業に従事させ格差のない社会を作ろうとする思想)を掲げるクメールルージュによって行われたのは罪のない国民の大虐殺であった。この事実を実際に処刑も行われていたトゥールスレン博物館で学び、二度と繰り返してはならない歴史であると改めて感じた。そのため、トゥールスレン博物館に限らず、このような人類の負の歴史について学ぶことは、時にとても重苦しい気持ちになるが、とても重要なことでもあると感じた。

4. 世界遺産観光

アンコールワット、アンコールトム、タプローム、バンテアイスレイを訪問した。カンボジアの遺産は上座部仏教やヒンドゥー教の寺院である。西遊記の話のモデルとなった將軍のエピソード等、とても興味深い話が壁画として多く刻まれていた。また、建築そのものの魅力も実際に目で見て感じることもできた。異なる宗教や文化であっても人々の共通の遺産として大切にしていけるべきであると感じた。世界遺産は定期的な修復が必要であり、日本からも上智大学などのチームが遺跡修復のプロジェクトを推進しているということを知り、遺跡の中でも日本とカンボジアとのつながりを見ることができた。



写真 4 アンコールワットの前で記念写真

また、現地で出会ったカンボジアの教員養成所の学生とアンコールワットやアンコールトムの話をする中で、彼らがカンボジアの歴史を、エピソードを交えて多く話すことができるということに驚いた。カンボジアの学生の多くが、自分の国の歴史に興味を持っており、誇りに感じているということを知った。とても素敵な文化だと感じた。

5. 最後に

今回のカンボジア研修で、私は教育の大切さを実感し、考えた。カンボジアでは、40年ほど前までクメールルージュ政権下で国民の大虐殺が行われていた。この大虐殺によって知識人を中心とした国民の3分の2が虐殺されたとも言われており、その影響は現在の経済や教育にも爪痕を残している。今後のカンボジアの発展の



写真 5 小学校の休憩時間 子どもたちと遊びました

ため、また、ポルポト政権下で行われたような人類の負の歴史を繰り返さないためにも、人々が様々な知識を得るとともに、思考力や判断力を身につけられるような教育を行うことがカンボジアのみならず世界中の人々にとって必要であると実感した。その教育の基盤となっているのが人々の健康である。私は将来、養護教諭としての経験を積みながら、子どもたちの健康のために何ができるのかを国や地域の実態に合わせて考えたい。そしてカンボジアをはじめとする途上国に、日本独自の職業である養護教諭の職務や役割について伝え、広め、根付かせるための活動ができるようになりたい。このようにカンボジアをはじめとする途上国の学校保健ひいては



写真 6 1班 レストラン Yellow Mango での夕食

教育の発展に寄与するとともに、若い力に溢れ発展の著しいカンボジアからも多くを学ぶことで日本の教育の発展につなげられるようになりたいという思いが強くなった。そして何より、文化や習慣が違って私たちと同じように色々なことを考えたり感じたりしながら日々を過ごしている人たちとつながることができ、カンボジアをさらに好きになった。また必ずカンボジアに行きたい。

カンボジア教育実地研修で学んだこと

養護教諭養成課程

3年

1. はじめに

2019年1月9日から1月18日までの10日間、カンボジア教育実地研修のチームの一員として参加させていただいた。私は、今まで海外に行く経験がほとんどなく、他国の生活に興味があった。カンボジアという国に対して、日本は多くの支援を行っているため、テレビなどでも度々目にすることはあるが、私自身は興味があっても知っていることは本当に少ないと思った。そこで、今回のカンボジア教育実地研修に参加し、現地の学生や子どもとのふれあいを通して、カンボジアの生活などについてよく知りたいと思った。さらに、私は養護教諭を目指していて、学校における子どもの身長や体重の測定方法を授業で習っている。今回、それらの知識を少しでも使うことができると思ったので、私にもなにか貢献できることがあれば良いと思った。

今回、研修を通して、私のなかでカンボジアに対するイメージが大きく変わった。本報告書では、この研修を通して学んだこと等を述べる。

2. カンボジアの学校と教育

都市部と農村部の学校で教室や子どもの様子が違っていた。学校自体も都市部の学校は、すごくきれいで、教室には電気や扇風機が付いていたり、床にタイルが詰められていたり、黒板はホワイトボードであった。農村部の学校は、少し古そうな感じで、教室には電気もなく、床は外と同じような土の学校もあった。都市部の学校と農村部の学校には大きな違いがあり、特に農村部では電気がないので、教室は暗く、勉強がしづらい環境にあるように感じた。



写真1 NIE 附属小学校の校舎

どの学校でも、子どもたちは一生懸命勉強していた。授業では、日本と同じように先生が前に立ち、子どもに指示をしたり、全員で声を合わせて読み物をしたりしていた。Thlork 小学校では、子どもたちが鍵盤ハーモニカを使って「幸せなら手をたたこう」をクメール語だけではなく、英語やフランス語、さらには日本語でも歌ってくれた。とても驚くとともにカンボジアの子どもたちは勉強に熱心に取り組んでいることが伝わり、とても感動した。子どもの勉強に取り組む姿はもちろん、教師は集中できていない子に声をかけるなどの様子が見られ、子どもをよく観察して指導をしているように感じた。

3. 発育調査の実施

今回のカンボジア教育実地研修では、全部で 5 日間にわたって測定を行った。プノンペンでは NIE 附属小学校、シェムリアップでは Thlork 小学校、Phum Norkor Krav 小学校、PTTC 附属小学校での測定を行った。それぞれの学校によって測定は部屋を貸していただき、室内で行うものや、屋外で行うものがあった。対象はすべて小学生であった。調査は、身長・体重測定は全員が行い、一部の子どもは組成計を用いて、筋肉量・BMI・骨量の測定も行った。私の班は、主に女子の測定を行った。初めに測定時の注意事項などを通訳をしてもらいながら説明をしてから、測定に入った。1つのグループに現地の学生さんが1日2人ずつつき、一緒に測定を行った。



写真 2 Thlork 小学校での体組成測定

プノンペンの子どもは、痩せている子どもも見られたが、自分が思っていたよりも標準か、肥満傾向の子どもが多く見られた。また、ネックレスやブレスレット、時計をつけている子どもが多く見られたため、都市部の子どもは、比較的裕福な家庭も多いように感じた。最初の測定方法の説明で、体組成は一部の子しか測定しないと説明したのにも関わらず、測定をしたがる子どもが少し見られ、機械に興味を持っているように感じた。

シェムリアップの子どもは、明らかに痩せているように見える子どもが多かった。実際に測定を行うと、身長は低く、体重は少ない子どもが多く見られた。また、体組成で BMI を測定すると、値が 20 もない子どもが多く、なかには 1 桁の子どももいた。ネックレスやブレスレットをつけている子どもはあまりおらず、学校に購買のような子どもがお菓子などを買える場所があるからか、お金を手に持ってきている子どもが見られ、都市部との違いを大きく感じた。

3. 食育指導

食育指導として、愛教大の先輩が作ったという「食まるファイブ」を子どもたちに紹介した。私たちが、ほねまる・にくまる・りきまる・ベジまる・フルーツまるになりきって、子どもたちの前で紙芝居を行った。紙芝居のときは、子どもたちはにこにこした顔で一生懸命聞いており、また、好きなものに手を挙げるところでは元気よく腕を伸ばして手を挙げている様子が見られた。最後に自分の 1 番好きな食まるの缶バッジをプレゼント



写真 3 食育指導の様子

したが、みんな笑顔で受け取りに来ており、バッジをすぐにつけている子どもがほとんどだった。日本の子どもとカンボジアの子どもの比較して、日本の子どもでは、比較的野菜があまり好きではない子どもが多いように感じるが、カンボジアの子どもは、「野菜が好きな人？」と聞いたときに多くの子どもが元気よく手を挙げていたことには、少し驚いた。

4. カンボジアの子どもとのふれあい

カンボジアの子どもたちはみんな明るく元気で、すごく良い印象を受けた。人見知りなどを全くせず、英語で会話をしたり、一緒に遊んだりした。追いかっこをしたり、バレーボールやサッカーをしている子どももいた。誰かを追いかけるとそのまわりの子どもがみんな逃げるので、気が付けば大人数で追いかっこをしていた。暑いなかで走り回って、私は疲れてバテバテになってしまったが、子どもたちはみんな元気に走っていた。また、写真をとろうとすると子どもたちがみんな写真におさまりきれないくらい集まってきており、本当に活発な子どもが多いなと感じた。



写真 4 Plum Norkor 小学校の元気な子どもたち

5. 学生との交流

プノンペンでは NIE、シェムリアップでは PTTC の学生と一緒に測定を行った。将来、私たちと同じ教師を目指している学生と話したり、一緒に折り紙を折ったり、ご飯を食べたりできてとても良い経験になった。私は英語があまり話せず、単語だけで伝えてしまったことが多かったので、もっと英語を勉強しておけば良かったと少し後悔した。

測定では、身長や体重の測定や子どもに名前や誕生日の確認をしてもらった。彼らは積極的に私たちの行うことに対して手伝ってくれたり、子どもの誘導を行ってくれたりした。そのおかげで、とても順調に測定を行うことができた。また、測定だけではなく、準備や片付けも手伝ってくれたり、荷物を持っていると代わりに持ってくれたり、みんなとても優しくて心配りができていて、本当に教師に向いている人たちだなと感じた。



写真 5 NIE の学生と一緒に作った折り鶴

6. 観光

今回の研修では、アンコールワットやアンコールトム、トンレサップ湖、トゥールスレン博物館など、たくさん観光することができた。その中でアンコールワットは、今まで私は教科書で見たことはあっても、詳しくは知らなかったが、アンコールワットまでの石が敷き詰められた道は、象にのせて石を運んできた、と教えていただいた。ただ楽しいだけでなく、新しい知識を得ることができた。また、トゥールスレン博物館では当時虐殺が行われた部屋や頭蓋骨などがそのまま残っており、自分のなかで特に印象に強く残った。たくさんの場所を訪れ、実際に自分の目で見ることができ、とても感動した。このような文化に触れることでカンボジアのことをより深く知ることができたと感じたため、そのすばらしさを発信するとともに、日本の文化も大切にしたいと思った。



写真6 アンコールワットの前で



写真7 トンレサップ湖の水上生活

7. おわりに

このカンボジア教育実地研修は、私にとって本当に実りのある研修だったように思う。カンボジアの子どもや同じ教師を目指す学生との交流を通して、実態をとらえることで、日本とはいかに違うかを改めて実感することができた。また、カンボジアの子どもたちと接してみて、やっぱり私は子どもが好きだと感じることもできた。慣れない土地で海外の方とコミュニケーションをとるという経験は私にとって初めてで、不安でいっぱいだったが、研修のチームのみんなや先生、カンボジアの方々がとてもあたたかく接してくれたおかげで、10日間楽しく元気に過ごすことができたとともにとても貴重な経験ができた。今回の経験を活かして私は養護教諭として、子どもにこの経験を伝えていくとともに、子どもの肥満や痩せなど健康問題を踏まえた上での食育の指導などに力を入れていきたいと思う。また、多様な視点を持って他の教職員と連携をとり、子どもたちに寄り添うことのできる養護教諭になりたいと考えている。

カンボジア教育実地研修で学んだこと

養護教諭養成課程

3 年

1. はじめに

2019 年 1 月 9 日から 1 月 18 日にかけて行われた、カンボジア教育実地研修に参加させていただいた。新しいことに挑戦する事が好きで、これまで行ったことのないカンボジアでの実習があると聞き、ぜひ参加してみたいと思ったのがきっかけである。また、行くにあたって、カンボジアにおける教育体制や現状を実際に行って確かめ、日本との違いを知る事で、教育に対する視野を広げたいと考えた。

実際にカンボジアに行くまでは、貧しく衛生状態がよくない国であるというどちらかというマイナスイメージであった。しかし、行ってみると、そのイメージが大きく変わるとともに、想像していたものとは全然異なる経験ができ、とても充実した日々を送ることができた。

2. 測定の実施と各学校の様子

プノンペンで 1 校 (NIE 附属小学校)、シェムリアップで 3 校 (Thlork 小学校、Angkor Krau 小学校、PTTC 附属小学校) での身体測定を実施した。私たちの班では主に女子の測定を実施した。

測定は、プノンペンでは NIE の学生、シェムリアップでは PTTC の学生と一緒にいった。現地で身体測定をできる人材を増やし、身体測定を含む健康意識の向上を図るため、身長と体重の測定を現地学生に手伝ってもらった。

現地の学生とは英語でコミュニケーションをとった。伝わらないときには、私たちは身振り手振りで何とか伝えようと頑張っていたのに対し、現地の学生は、こちらが分かりやすいよう言い換えてくれた。日本で生活していたころは、英語は得意な方だと思っていたのだが、スピーキング能力の差を実感した。

また、測定の際の注意点等、私たちが伝えることが困難な点については、ガイドさんの助けを借りながら行った。現地の学生は、飲み込みが早く、こちらの意図をくみ取って行動してくれるので、どの学校でも大きなトラブル無く終えることが出来た。



写真 1 現地学生の測定の様子

プノンペン、シェムリアップ共に、子どもは全員制服を着用していた。ピアスや時計、ブレスレットなどの装飾品を身に付けている子どもが多く、驚いた。全体を通して、都市部の学校に通う児童は体つきがよく、農村地域の子どもは貧弱な印象を受けた。その学校でも、低学年では英語が通じないため測定に時間がかかったが、高学年では英語が通じるので比較的スムーズに行うことができた。

NIE 附属小学校は都市部にあり、子どもたちはきれいな制服を着ており、靴も履いていた。ここでは、学校内でアイスクリームなどのお菓子を食べている子どもの姿をよく見かけた。お菓子を買うためか、名札の裏にお金を忍ばせている者も少なくなかった。



写真 2 朝食準備(Thlok 小学校)

Thlok 小学校までの道のりは、整備されていないガタゴト道で、いまだかつて経験したことのない振動が続いた。Thlok 小学校では、朝の給食の様子を見学させていただいた。給食作りは、当番制で、子どもたちが作っていた。完成した朝食は各クラスの担任が、児童が各自持っている器によそう。朝食をよそってもらった児童は、教室前の廊下に敷かれた御座の上でご飯とスープを食べていた。

Angkor Krau 小学校は、今年初めて測定を行った学校である。制服は着ていたものの、汚れている子どもや、丈があっていない子どもがいた。靴ではなく、サンダルを履いている子どもが多かった。午前と午後の子どもの測定したため、子どもたちの入れ替わりに立ち会うことができた。バイクで送ってもらっている子が多かったが中には車で迎えに来ている親もいた。自由時間も多かったため、ブランコや追いかけて、バレーボール、折り紙作りなどを一緒に楽しむことができた。

PTTC 附属小学校は、教員養成学校の附属小学校である。そのためか、バスケットゴールや横断歩道の渡り方、手洗い等衛生に関する掲示物があった。児童はきれいな靴を履いており、測定結果からも、比較的裕福な家庭の子どもが多いように感じた。

3. トンレサップ湖と現地の人の生活

トンレサップ湖では、実際に水上生活する人々を見ることができた。クルーズをするまでは、水上での生活を想像することができなかったが、実際に多くの人が生活している様子は、思ったよりも日常的に見えた。



写真 3 トンレサップ湖

ボートを走らせている途中には、木造の手漕ぎ船に乗った母親と首に蛇を巻き付けた小学生くらいの子どもを見かけた。近づいては来なかったものの、ガイドさんによると、彼らはボートに乗る観光客に、蛇の写真を撮る代金や蛇を触る体験料金を請求す



写真 4 蛇を首に巻く少年

ることで稼ぎを得ているようだ。

トンレサップ湖だけでなく、カンボジアで過ごす中で、向こうから近づいてきて、サービスをしてくれたのかと思った矢先にお金を請求される機会が多くあった。カンボジアのなかでもシェムリアップ等の観光地では、こうして観光客からお金を得て生活をしている者も多いという。今回訪れたどの観光地でも、小学生くらいの子どもが「1 ドル！お姉さん、安いよ！」「1 \$, 1 \$, please!」と言いながら、近づいてきた。その身なりや様子から、渡してしまいたい気持ちになったが、“渡すことは刹那的な施しにしかならず、渡してくれる人がいると学ぶことで、彼らが観光客に依存してしか生きていけなくなってしまう。”というガイドさんの言葉にハッとさせられた。

4. トゥール・スレン虐殺博物館

トゥール・スレン虐殺博物館（S-21）は、ポル・ポト政権による知識人の大量虐殺の際に、囚人に拷問・処刑を行われていた政治犯収容所である。1 万 4 千人程度収容されていた囚人は、技術者等有能と判断された 8 名を除き、全員殺されたという。



写真 5 トゥール・スレン虐殺博物館

市街地にあるこの博物館は、収容所になる前は、子どもたちの笑い声の響く普通の学校であったそうで、門をくぐり入場した段階では、虐殺が行われていた場所とは思えない。しかし、建物に一歩足を踏み入ると、展示物やおいてある器具からあふれ出る異様な雰囲気によって圧倒された。遺体の生々しい写真や、実際に使用されていた牢屋、鎖、足枷、拷問器具の数々…絵や写真も多く展示されていたが、どれも現実を起こったことであると考え、何とも言えないような気分になった。

しかし、これが起きたのはたった 40 年前のことである。私たちの親や祖父母が生きている時代の出来事だ。決して遠い昔の話

ではない。実際、カンボジアでは、高齢者をほとんど見かけなかった。これは、平均寿命が長くないことと、ポル・ポト政権時代に多くの命が奪われたことの影響だと考えられる。

知識人が殺されたこの出来事は、カンボジアの教育にも大きな影響を与えている。現在カンボジアの学校では、午前中に授業を受ける子どもと午後に授業を受ける子どもで分ける2部制をとっているが、これは教室数・教員数が足りていないためとも言われる。また、知識人の多くが殺されてしまったことにより、教員が激減し、数補うために村長が選んだ村人が教員になっている所もあるため、教員の育成は大きな課題となっているそうだ。知らない、わからないことがたくさんあるということを痛感するとともに、今もどこかで苦しんでいる人々がいるのかもしれない、と意識させられた。

5. 所感

今回の研修で、日本は異なる学校形態に触れたことで、日本の教育について、少し離れた視線で見ることができるようになったように感じている。

カンボジアで得たものは数多くあるが、現地の学生や子どもたちとの交流は非常に大きな意味を持っている。言葉や文化の違う人々と協力して、身体測定に取り組む中で、言葉でうまく伝えられないことも多々あった。しかし、多少言葉はわからずとも、相手が思っていることを理解しようとすることも1つのコミュニケーションであると感じた。その一方で、英語の重要性を改めて実感



した。国際化に伴い、異なる言語や **写真 6 アンコールワットにて**

文化の人々とも英語で意思疎通できるようになってきている。実際にカンボジアでも、英語を使って多くの人とコミュニケーションを取ることができた。今後も、英語の重要性はますます上がってくるだろう。同じ国の人同士での関わりだけで満足するのではなく、様々な国の人々と関わり、お互いの価値観や考えを知るための手段として、英語は重要な役割を果たしていることを、身をもって知ることが出来た。

カンボジアに行ったことにより得る事の出来た視点や感覚を、今後の学生生活や将来職業に就いたときに活かしていきたい。

最後に改めて、国際交流センターの方々、先生方、そして一緒に10日間過ごした学生みなさん、本当にありがとうございました。

カンボジア教育実地研修 報告書

養護教諭養成課程

3年

1. はじめに

平成31年1月9日から1月18日にかけて実施された、カンボジア教育実地研修に参加させていただいた。様々な環境下にあるカンボジアの子どもたちの身長、体重、身体組成を測定し、発育調査をすることが主な目的である。海外の教育や子どもの状況を実際に見て経験し、養護教諭を目指す身としての視野を広げたいと感じたことが参加の動機である。研修では測定や、現地の子どもたちや教師を目指す学生との交流など様々な経験をすることができた。この報告書では、研修を通じての学びや感じたことを述べる。

2. 子どもたちの測定



図1 測定の様子

ない事態に焦りながらも、研修のメンバーと試行錯誤した。その結果、段差からの測定値+段差の高さという測定方法を見つけることができた。子どもたちの様子を見て驚いたことは装飾品の多さである。ネックレスやピアス、ブレスレットや腕時計などを持っている子が多かった。また、子どもたちがクメール語のほかに英語を使えることにも驚いた。学年が上がるにつれ英語が伝わる子どもが増えたため、測定がスムーズに進んだ。

シェムリアップでは15日にThlork Primry School(給食有)、16日にPhum Norkor Krav Primary School(給食無し)、17日にPTTC附属小学校で測定を行った。屋外で測定していたこともあるが、NIEの子どもたちとは異なり、服装や手足の汚れが目立ったように感じた。履物も子どもや学校により異なっていた。多くの子どもはサンダルをはい

プノンペンでは10,11日にNIE附属小学校で測定を行った。現地には測定道具はそろっていない。日本から体重計と組成計を持っていった。身長は重りをつけた紐、メジャー、三角定規を使って測定を行った。柱のある場所での測定の予定であったが、当日に場所の変更があった。測定場所の壁には段差があり、メジャーをまっすぐに貼ることができない。想定してい

ていた。裸足で屋外を歩いていた子どももいたため、測定時に汚れを落とすことに苦労した。中には靴を履いている子どももいた。NIE の子どもたちに比べ、身体の高い子どもが多かったように感じた。Thlork Primry School、Phum Norkor Krav Primary School では英語の伝わる子は多くなかったが、PTTC では多くの子に英語が伝わった。

どの小学校の子どもたちも落ち着いている子どもが多く、測定中は笑顔を見せてくれた。測定のお礼として渡した折り紙にはどの子どももととても興味を抱き、喜んでくれた。紙飛行機や手裏剣で遊んだり、お互いの折り紙を見せ合ったりしている様子が印象的だった。

3. 現地の学生との関わり



図 2 NIE の学生と

しようとしてくれた。また、私にも分かるようゆっくりと簡単な言葉で会話をしてくれた。もっと英語力があればと何度も思った。しかし、わからなくても積極的に話しかけることで、たくさん交流することができ、とても楽しかったし良い経験であった。学生たちは日本語に興味を持ってくれ、単語や挨拶の日本語訳、いただきますやごちそうさまの意味などたくさんの質問をしてくれた。私の拙い英語力で上手に伝えられた自信はないが、とても喜んでくれ、一つ一つを記録してくれており、私もうれしく感じた。

NIE、PTTC のどの学生も私たちが測定の仕方を教えるとすぐに理解し、実践してくれた。測定を進めるうちに組成計での測定に興味を持っていた。説明し、実際に学生たちの測定をすると、結果を見て様々な反応を示したり、記録して持ちかえったりしていた。後日、NIE の学生の一人から SNS で『Now we are discussion about teaching at NIE』と

プノンペンでは NIE の、シェムリアップでは PTTC の学生たちに測定を協力していただいた。測定方法の説明や測定中、食事などでたくさん交流することができた。お互いに将来教師を目指す学生として関わることができ、とても良い経験ができた。私は英語がとても苦手で話すことは全くできない。単語の羅列や簡単な会話しかできず、身振り手振りばかりであったが、そんな私の拙い英語を理解



図 3 SNS で送ってもらった写真

いうメッセージとともに、討論の様子の写真が送られてきた。測定についてとても興味を示してくれ、さらに学生間で深め合ってくれていることにとてもうれしく感じた。彼らが今後教師としてカンボジアの教育に携わる中で、身体測定技術が広がっていくことが期待できると感じた。

4. カンボジアの小学校



図 4 朝食を作る様子

カンボジアの小学校は、午前・午後で子どもが入れ替わる二部制となっている。シェムリアップでの Thlork Primry School（給食有）では早朝から当番の子どもが朝食を作っており、食事をとった後に授業が始まる。屋外に莫藪のようなものを敷き、その上に集まって食事をとっていた。手足が汚れた状態で食事をと

っていたので衛生面が気になった。校内には水汲み上げポンプがあり、そこから

水を得ていた。おそらく上下水道の区別はないのでその点も気になった。

授業中の様子である。掲示物がとても充実していたことが印象的であった。教室には電気はなく、窓から差す日光のみであり、薄暗い中で勉強していた。視力の低下につながる恐れがあるので気になった。また、雨季にはどのようにしているのかも気になった。使用していた筆記用具はどれも使い込まれたもののばかりで、鉛筆は 5cm ほどの鉛筆を使って



図 5 授業中の様子

いる子どももいた。



図 6 日本の絵本が置いてある図書館

図書室の様子である。私が小学校を見学する中で一番印象強かった場所だ。クメール語の絵本が並ぶ中、日本の絵本がいたるところに置いてあった。日本語のままのものや、上からクメール語で翻訳されたシールが貼ってあるものもあった。見るだけでなく、きちんと内容を楽しめるようになっている。有名な絵本はもちろん、日本昔話もおいてあった。

カンボジアに学校を建てよう、日本の絵本を送ろうといった支援は聞いたことがあったが実際に現地に行き、きちんと届いていることが確認でき、とても感動した。また、図書館にはひらがな・カタカナ表が掲示してあった。以前、日本人が書いて残していったのだろうか。誰でも見やすい位置に大きく掲示してあった。違う国のたった一部



図 7 ひらがな・カタカナ表の掲示物

屋で、日本を強く感じることでとても嬉しかったし感動した。子どもにきちんと支援が届くことを、身をもって感じることで、私も何かできたらなと感じた。

5. 最後に

今回のカンボジア教育実地研修では、普通の旅行ではできないことをたくさん経験させていただくことができた。実際にカンボジアに行き、現地の教育や子どもを自分の目で見て感じることで、教師を目指す身として視野が広がったように感じる。まだカンボジアの教育に発展の余地は十分に感じたが、日本より優れていると思った点もある。2. 子どもたちの測定 でも述べたが英語が使える点である。研修中、多くの人と交流する中で主な言語は英語であり、何度も英語力のなさを悔やんだ。今後日本から出ないし、できなくても問題ないと考えていたことがとても恥ずかしくなり、英語を身につけたいと強く感じた。

教師を目指す現地の学生と出会えたことも大きな財産であった。意欲的に学ぼうとする姿勢、現職の先生のように子どもと上手に接する姿、日本の勉強にも興味を持ってくれること、どれも自分には足りないことばかりで感服した。未熟な自分は教師になる知識や姿勢が備わっていないと将来が不安になることもあった。しかし、子どもは国を超えてもやはり可愛く、交流し学ぶ姿を見るとき、子どもが好きだと再確認することができ、教育に携わりたいという気持ちがより一層強まった。この研修で感じた気持ちや学んだことを、残りの大学生活や、その先の進路に十分に生かしていきたい。

1. はじめに

高校生の頃から、英語が好きで海外ボランティアについて興味を抱いていた。しかし学業中心の生活や具体的にどのように行動して良いのか分からず海外ボランティアへの夢を諦めていた。そんな時自分の尊敬する先輩がこのカンボジア実地研修に参加するということを知り、このプログラムに興味を持ち始めた。

海外へ一度も行ったことがなく、カンボジアについて何も知識を持っていない私がこのプログラムに参加しても良いのか躊躇っていたが、カンボジアの子どもたちのために何かしたいという思いや日本以外の教育史についても学びたいと感じたため、このプログラムに参加することを決めた。

2. カンボジアの教育の現状

今回のプログラムでは、カンボジアの子どもたちの発育測定を行うことを目的としていた。カンボジアでは、まだ発育測定についての知識が普及していない。自分の成長について知ることはこれからの生活習慣を見直すきっかけになると考える。そのため、カンボジアの子どもたちにも自分の成長について興味を持ち、健康とは何か考える新たなきっかけになれば良いと考えた。



写真 1 Thlork 小学校の児童

また、プノンペンとシェムリアップの二つの地域で測定を行ったが、地域によって子どもたちの身なりが大きく異なることに気付いた。都市部の子どもたちは、靴下・運動靴を履いており、比較的裕福な家庭のように思われた。一方、農村部の地域の子供たちは制服を着ていない子どもやサンダルで登校する子ども、裸足で登校する子どもの姿が見られた。地域格差について考えるきっかけとなった。

今回は四つの小学校で発育測定を行った。

1) NIE での測定

NIE は首都プノンペンにある小学校である。ここでは、NIE に通う現地の学生と一緒に発育測定を行った。この小学校は去年も測定を行っており、去年と今年のデータからどの児童においても身長、体重共に成長していることを読み取ることができた。現地の学生には身長や体重を測ってもらったが、測り方についての知識がなかったため、一緒に測ってみたい測り方について英語で説明したりした。初めは言いたいことが伝わらず、“I don't know what to say!”と言われてしまったが、身振りで表現したり、班の学生と協力したりして伝えることができた。

また、測定の合間を縫って日本の文化について話したり、プノンペンのおすすめのお店について話したりして仲を深めていった。測定が終わると子どもたちに折り紙を渡したが、現地の学生にも鶴や手裏剣などを一緒に折るなどして過ごした。



写真 2 NIE での測定

2) Thlork 小学校での測定

シェムリアップの農村部に建てられた小学校である。こ



写真 3 朝食を作る子どもたち

の小学校の周りには野放しにされた牛が何頭もあり、道路も舗装されていなく、日本の小学校の環境とは大きく異なっていた。また、子どもたちは7時に登校しており、中にはもっと早く登校して子どもたち全員分の朝ご飯を作っている子どももいた。日本では考えられないことであり、カンボジアに来て最も印象に残っている光景であった。

この小学校ではシェムリアップにある教員養成学校である PTTC の学生と一緒に測定を行った。PTTC の学生とはこの測定の前日に測定のワークショップを開いたため、スムーズに事が進んだ。また、現地の子どもたちはサンダルや裸足で登校することが多いため、体重や体組成を測定する際には念入りに足を拭くことを心掛けた。

3) Phum Norkor Krav 小学校での測定

身長測定の際に柱を使用した、その柱が歪んでいたため、数値を誤らないよう正確に測定した。また、測定するための十分なスペースがなかったため測定の順序を伝えることや子どもたちを並ばせることに苦労した。

昼休憩になると、日本の学生と子どもたちでバレーボールをしたり、折り紙で遊んだり非常に楽しんでいる様子を見ることができた。



写真 4 バレーボールで遊ぶ子どもたち

4) PTTC 附属小学校での測定

シェムリアップの都市部の小学校であるため、子どもたちは全員靴下と靴を履いていた。また、去年肥満気味であった児童が今年の測定では大幅に体重が減っており、その背景には食生活の変化があったことを知ることができた。去年も測定していたこともあり、高学年の児童はこちらから特別な指示を出さなくても自ら動いてくれたため、スム

ーズに測定を行うことができた。

学校環境も整備されており、児童の靴箱やバスケットゴールなど他の小学校では見られなかった設備も見ることができた。



写真 5 PTTC での測定

3. しょくまるファイブについて

今回のプログラムの目的の一つに食育の普及がある。子どもたちの栄養状態は発育に直接関係する。またカン

ボジアでは食育についての知識は普及していないため、「しょくまるファイブ」という紙芝



写真 6 しょくまるファイブ

居を通して、子どもたちや教員に食育について知ってもらう良い機会であったと考える。ただ紙芝居を行うのではなく、子どもたちも一緒に参加できるようにするために子どもたちの好きな食べ物を尋ねた。そして、好きなものだけでなく色々なものを食べることによって、自分たちのためになるということを伝えた。最後にしょくまるファイブのイラストが描かれた缶バッジを渡すことで子どもたちに食育についての印象が残ったのではないかと感じる。

4. 観光地

カンボジアの観光地も幾つか巡った。プノンペンではトゥールスレン虐殺博物館に行った。ここでは、カンボジアの歴史について学ぶことができた。今まで知らなかったカンボジアの現実に衝撃を受けた。ポルポト政権により、何人もの人が無差別に殺害されたということを知った。時間をかけて苦しみながら亡くなっていった人々の面影が今でも残っており、生々しく感じた。その現実に目を背けたくなくなってしまいが、これはつい数年前の出来事であり、命の重さを考えるきっかけとなった。

シェムリアップではトレンサップ湖を船に乗って視察した。湖に浮かぶ家が幾つもあり、そこには生活している人が実際にいるという現実に違和感を抱いた。日本では想像もつかない生活である。また、中継地点に行くまでに幼い子どもがボートを一人で漕いで遊んでいたりと、湖に入って蛇を獲る少年がいたり、子どもたちの遊び方も見ることもできた。日本の子ども遊びとは全く異なっており、日本の子どもたちよりも



写真 7 トレンサップ湖

のびのびとしている印象を抱いた。

また、アンコール遺跡群にも行くことができた。



写真 8 アンコールワット

カンボジアの観光地といえばアンコールワットだけだと思っていたが、アンコールワットはアンコール遺跡群の一つであり、アンコールワットの他にも様々な遺跡が存在することを知った。どの遺跡にも当時の生活や争いの様子などが彫られており、当時の歴史的背景を読み取ることができた。遺跡群の一つであるタ・プロームと呼ばれる遺跡には大きなガジュマルの木と寺が一体になっており、荘厳な雰囲気であった。また、アンコールワットはとても広く壁画が未完成のままである箇所も幾つか存在した。写真で見るよりも遥かに大きかった。現代のように重機など何もない時代にどのようにして遺跡を作り、繊細な壁画を作り上げたのか疑問を抱いた。

このようにカンボジアの観光地にはこれまでの歴史が反映されており、当時の暮らしを知る手がかりとなる。他の世界遺産についてもさらに学んでみたいと感じた。

5. おわりに

今回のプログラムでカンボジアの教育制度や歴史、人々の暮らしについて多くのことを学ぶことができた。首都プノンペンには想像以上に発展しており、高層ビルが幾つも立ち並んでおり、技術の進歩を感じることが



写真 9 NIE の学生との写真

できた。反対に農村部では道路も舗装されていなく、お土産を売りに来る子どもの姿は衝撃的であった。

また、学校に通う子どもたちは無邪気で初対面の日本の学生に対しても人見知りせず、話しかけてくれた。学校環境は充分であるとは言えないが、その中でも子どもたちが生き生きとしている様子を見ることができた。朝ご飯を作る子どもたちや他の子どもたちが遊んでいる中で一人で花に水をやる子どもの姿も見ることができた。日本ではあまり見ることはない光景だが、カンボジアでは子どもたちが行うことが普通なのだろう。日本の「普通」がカンボジアの「普通」ではないことを知り、それと



写真 10 集合写真

共にこの違いを忘れてはならないと感じた。また、このプログラムを機に何人もの現地の学生と知り合うことができた。国は異なっているけれども教師を目指しているということは同じであり、彼らの積極的に学ぶ姿勢はとても刺激的であった。物事について一から自分たちで考え、行動していく点は見習うべき点であると感じた。今回の経験を機に他国の小学校の様子についても学んでみたい。そして子どもたちのために自分には何ができるかを考えていきたい。

カンボジア教育実地研修で学んだこと

養護教諭養成課程

3年

1. はじめに

2019年1月9日から18日にかけて、カンボジア教育実地研修を行った。主な目的は、カンボジアの子どもたちの身長、体重、身体組成の測定による発育調査である。加えて、現地の学生と交流することで、カンボジアにあるもので身体測定をする技術を広めること、食育の重要性を伝えることも、この研修の目的の一つである。

私は、日本には無いもの、経験できないことを求めて海外に行くことが好きだ。今回の研修に参加しようと思ったのも、その延長であった。しかし、こんなにも現地の人々と関わり、生活に親しみ、歴史に触れることのできた海外は初めてであった。

本報告書では、カンボジア実地研修で学んだこと、感じたこと、体験したことなどをまとめる。

2. カンボジアと日本のつながり

カンボジアには、日本とのつながりを感じるものが多くあった。

シェムリアップの小学校では、校内を自由に見せてもらうことができた。図書室に入ると、私も小学生の時によく読んだ絵本がいくつも置かれていた。本を開くと、日本語の上からクメール語に翻訳されたシールが貼られており、日本からカンボジアに送ったものであろうと想像することができた。図書室の壁には、日本語のひらがなやカタカナの五十音が掲示されていた。ここからは、カンボジアの小学校の日本に対する友愛を感じることができた。



図1 図書室に置かれていた本



図2 日本の名前が書かれたピアノカ

また、音楽室には、日本語の名前が書かれたままのピアノカが重ねられていた。これも日本から送られたものだろう。子どもたちがこのピアノカを使った演奏に合わせて、歌を歌ってくれた。私が通っていた小学校でもカンボジアの小学校に寄付をする活動が行われていたが、実際に小学校に届き、子どもたちが使っているのを見て、日本とカンボジアのつながりを強く実感することができた。

アンコールワットでは、日本の大学のチームが、遺跡の修復を行ったということを知った。教育を通じたつながりだけではなく、様々な面で日本とカンボジアの関わりに触れることができた。

3. カンボジアの町の様子

日本に比べると道路や交通が整備されていないと感じた。大量のバイク、ヘルメットを着用せずにバイクを運転する人々、一台のバイクに何人も乗っていること、信号のない大きな交差点など。日本で生活しては目にすることのない場面であった。

カンボジアの町で私が特に驚いたのは、電線だ。絡まっているのではないかと疑ってしまうほど多くの電線が町の中にたくさんあった。しかし、滞在中に電線を地下に埋める工事をしている場面も見ることができた。少しずつではあるが、町がきれいになっていくのだろうと想像することができ、日本では味わえない少しわくわくするような気持ちになった。



図3 シェムリアップの電線

4. カンボジアの教育の現状

①学校の様子

カンボジアの小学校は、午前と午後で子どもが入れ替わる二部制となっている。これは、子どもの人数に対して学校が少なく、全日制にするには学校が足りていないからである。日本のように自動的に進級できるのではなく、留年する子どもも存在する。加えて、家庭の事情などにより入学が遅い子どももいるため、1つの学年にも様々な年齢の子どもがいる。

シェムリアップの小学校では、水の出ない蛇口が設置されていた。乾季になると村全体が水不足に陥るため、普段から節水を徹底しているようだ。蛇口はタンクに繋がっているが、必要な時以外はタンクから蛇口に水が流れないように栓を閉めていた。

教室内は、照明がない学校もあり、学習するには少し暗いように思えた。また、同じ大きさの長机・長椅子が並べられており、大体2〜3人の子どもが1つの長椅子に座っていた。中には、体の大きさに机や椅子の高さが合っていないように見える子どももいた。同じ大きさの長机と長椅子では、個人の発育に合わせることはできないと思った。教室内の学習環境を整えることは、今よりも多くの費用や物資が必要であるためか、それほど重要視されていないためか、難しいのが現状であると感じた。

また、都会の学校や田舎の学校、附属学校など様々な小学校を訪れてみて、学校設備の差があると感じた。水洗トイレの有無、教材の充実さ、給食の有無などからだ。生まれた場所や家庭環境によって教育にも格差が生まれてしまうのはもどかしく思った。

カンボジアの発展とともに、教育がさらに重要視されるようになり、すべての子どもたちが平等に教育を受けられるようになると良いと思った。



図4 教室の様子(シェムリアップ)



図5 水の出ない蛇口



②子どもの様子

小学校の子どもたちはとても人懐っこくて無邪気だった。授業の休み時間には、おにごっこをしたり、折り紙やボールで遊んだりしたが、子どもたちと遊ぶのに言葉は必要なかった。

また、学校によって子どもたちの特色も違った。都会のプノンペンのNIE 附属小では、比較的靴を履いて

図6 外で遊んでいた子どもたち

いる子が多く、裸足の子はほとんどいなかった。アクセサリーやベルト、腕時計をしている子どもも多かった。一方で、シェムリアップの小学校では、サンダルを履いている子ども、または裸足の子どもが多かった。制服もサイズが合っていなかったり、破れていたりするものを着ている子どもが多かった。シェムリアップの中でも、PTTC 附属小の子どもたちは、ほとんど全員が靴下に運動靴を履いていた。

学校による違いは、子どもたちの服装だけではなく、子どもが比較的英語を理解している学校、測定の際に指示が通りにくい学校、折り紙を渡したときの子どもの反応など、色々な場面で学校ごとの違いが見られた。

5. 現地の学生との交流を通して

小学校での測定をする際には、現地の学生と協力して測定を行った。現地の学生との交流は、測定の間だけではなく、食事の時間にもあった。そこで1番に感じたことは、自分の英語力の低さだ。相手の言っていることを理解することができても、自分の言いたいことを文章で伝えることがほとんどできなかった。相手の言っていることの中でも微妙なニュアンスを理解できなかったり、スムーズに自分の考えていることを伝えられなかったりすることをもどかしく感じた。同時に、英語を使うことの重要性を痛感した。

会話の中では、自分の生活との違いを垣間見ることができた。アルバイトをしているかと尋ねると、勉強が忙しいからしていないと言っていた。また、カンボジアではアルバイトをしている学生の多くは学校に通うお金を貯めるためであると言っていた。アルバイトをしていない



図6 現地の学生との1枚

理由も、している理由も勉強をするためであると知って、彼らの学ぶことができることを当たり前としない姿勢や勉強に対する意識の高さが、自身とは大きく違い、少し恥ずかしかった。

6. トゥール・スレン虐殺博物館

カンボジアでの滞在中、学生同士和気あいあいとした雰囲気でも過ごすことが多かったが、ここでは違った。施設内に入ると、自然と誰かと一緒に回る学生はおらず、1人で見学をした。ここでの見学を通して、目を背けてしまいそうになるほど残酷なカンボジアの歴史に触れ、カンボジアの今やこれからについて深く考えることができた。

館内には、拷問が行われた部屋が発見当時のまま保管されており、鉄製のベッド、収容者を拘束する器具などが展示されていた。今でも床に染み付いた血痕から当時の拷問の生々しさを感じた。他の部屋には、拷問によって亡くなった人や収容所の管理者の顔写真が展示されていた。一部ではあるがこんなにも多くの無実の人々が命を奪われたと想像すると、胸が苦しくなった。収容所の管理者の多くは、少年であった。先生や医師などの知識人を処刑し、読み書きもできない少年を操るようにして拷問が続けられたそう。ここから教育の大切さについても考えさせられた。また、この出来事がカンボジアの発展が遅れてきたことにも影響しているのだろうと思った。

見学が終わった後にも、他の学生と感想を言い合うことはできなかった。ここで感じ、考えたことは、自分の心の中に深く刻まれた。こんなにも悲しく、苦しい出来事を二度と繰り返されないように、後世に伝えていかなければならないと強く思った。また、トゥール・スレン虐殺博物館からは、世界や後世に伝えようとする想いが伝わってきた。

7. おわりに

今回の研修を通して、私の中で教育に対する考え方が大きく変わった。発展途上国であるカンボジアに訪れたから感じることでできた教育の重要性、現地で学ぶ学生の教育や学ぶことへの意識を知ることができた。教育は国を支えるものであると実感することができた。

また、カンボジアに対して持っていたイメージも良い意味で崩れた。事前研修でカンボジアでは、ひったくりが多いことや交通マナーが悪いことなどを知って日本との違いに驚いていた。しかし、実際に現地の人々と関わってみて、温かく接してくれる人が多いことに気づいた。貧富の差が大きいこと、治安に問題があること、交通事故が多いことなどは、事実であるが、そこには国民性のせいにはできない問題が根底にあると思った。これらの問題が解消するように、発展していくことを願う。教育の発展は、カンボジアの発展に大きく影響すると思う。



図7 参加学生の集合写真

おわりに

今年は事前研修を9回行い実地研修に備えた。学生自身でテーマ別（地理・地形、気候、言語、人口・通貨、風俗・習慣、衣食住、教育、王朝・王朝文化、歴史、政治・経済、観光、交通、日本とのつながり）に調べた資料をもとに、「カンボジアの基礎知識」について学習を深めた。昨年度研修生からの「経験者に聞く」では、行程、身体測定の様子などについて話を聞いた。また、エピソードや持って行って重宝した物など参考になる話を聞いた。田中先生に話をしていただいた「健康管理講習」では、感染症や衛生面で気を付けなければならないことが身についた。カンボジア留学生によるクメール語学習では、挨拶をはじめ数の数え方や身体測定に使える会話を学習し有意義なものになった。測定方法やデータ入力の学習も現地ですぐに役立つことを目標に取り組むことができた。また、研修の前には15分ほどアイスブレイクの時間を取った。この研修を重ねることを通して、学生はお互いの人柄をより知ることができるようになり、仲間意識が深まっていった。

今回の研修では、本学学生とNIE学生・PTTC学生がワークショップの時間や子どもの身体測定を協力して行う機会が多くあり、それを通して学生同士の交流が深まっていった。今年の新しい試みとしてNIE学生・PTTC学生に「身体測定講習修了証」が手渡された。また、「食まるファイブ」を使った紙芝居を行い、バランスの取れた食事が大切なことを伝える食育の授業を行ったことは、昨年に引き続きカンボジアにおける食育の種をまいたという点で意義あることであった。特に今年は、「食まるファイブ」を使った紙芝居を行うときに学生が「食まるファイブ」の5人のキャラクターに扮し演じることを行った。学生も恥じらうことなくキャラクターの役になり切って演じたため、子どもには大変受けがよく、バランスの取れた食事の大切がよく伝わったと感じる。

カンボジアの現地では、学生は意欲的によく学んだ。学生間で思いやる気持ち、助け合う動き、子どもへの愛情ある眼差し、いろいろとチャレンジしてみようとする意欲、どれをとっても学生にとって有意義な時間になった。また、子ども特有の屈託のない明るさ、素直な眼差しは、どこの国でも変わらないと感じたに違いない。

学生の健康に配慮した日程を組んできたが、出発が朝の早い時間になる日を設定せざるを得ないこともあり、学生にとってハードな面もあった。今後、意見集約をして、よりよい教育実地研修になるよう取り組んでいきたいと考えている。

